

桑原専慶流いけばなテキスト

「器と花の痕跡」

日本のいけばなはどのようにしてできてきたのか。
絵巻、壁画、レリーフなどに残された、器と花の
痕跡を探す旅。

立花時勢粧の器

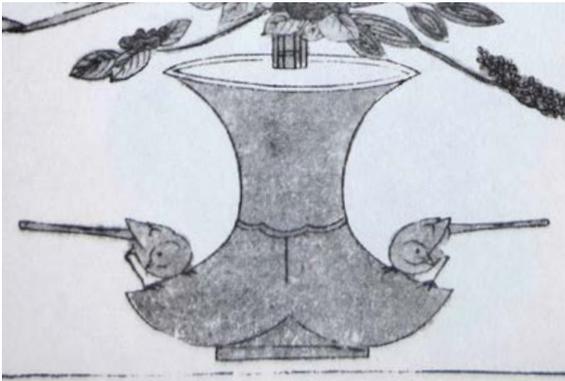
「立花時勢粧」には118の図が収められているが、その器は96種類もある。出版された元禄元年頃には、華やかな世相と立花の流行とが相まって、立花瓶にも様々な形や新しい意匠をこらしたものが作られた。

自由奔放な自然の息吹とその調和を表現しようとした富春軒仙溪。特に行や草の立花には、それに呼応するような変化に富んだ器を選んで使っている。

器の形だけを見ても様々な形態のものがあるが、立花瓶の遊びの部分として「耳」に注目してみよう。

- 図① 蟾螂 かまきり
- 図② 魚
- 図③ 象
- 図④ 鳥
- 図⑤ 兎 うさぎ
- 図⑥ 蝶 ちよう

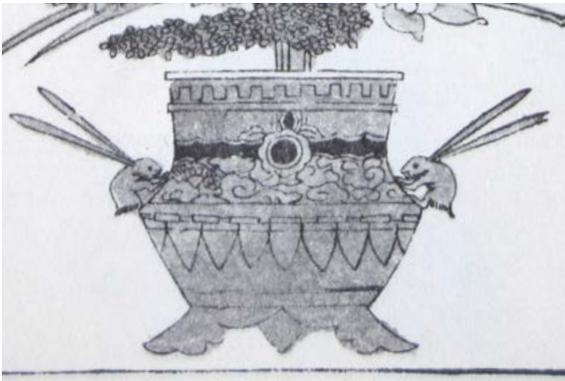
これらの意匠に釣り合う躍動感が花形にも求められることになるが、どんな花かは、それぞれの図で確かめていただきたい。



第六十六図 テキスト No.655



第七図 テキスト No.613・648 (に掲載)



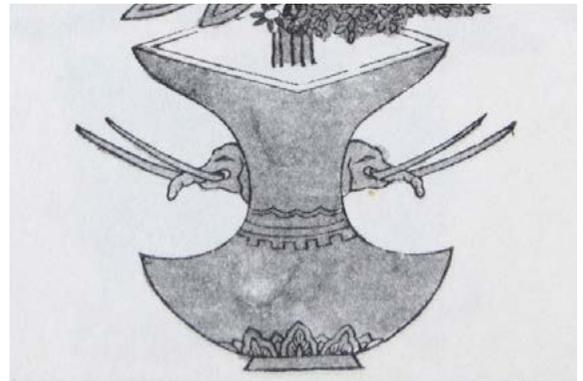
第七十図 テキスト No.674



第二十五図 テキスト No.647



第八十七図 テキスト No.654



第五十七図 テキスト No.673

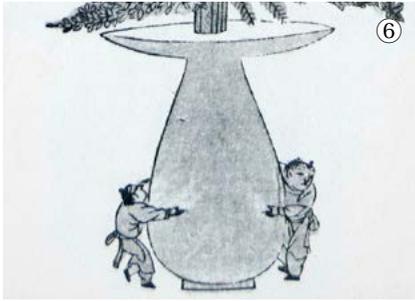
立花時勢粧の器 ②

「立花時勢粧」の立花図に描かれている立花瓶・砂鉢は96種類ある。前号につづき「耳」に注目してみよう。

図① 象



第一図 テキスト No.612・633に掲載



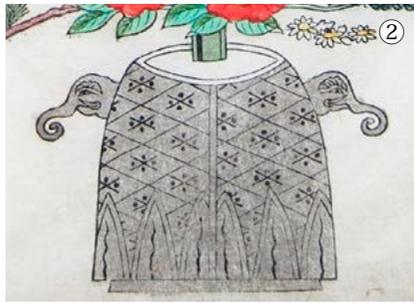
第六十図 テキスト No.661

一番最初の「真の花形」の器
第七十九図・第八十図の「真の対

の花」にも使われている(テキスト615)。

図② 象

この象は鼻の形が特徴的。「立花時勢粧」には象の意匠の



第二十四図 テキスト No.640



第五十九図 テキスト No.674

器が6種類ある。

図③ 龍

この図は富春軒による「除真の内草の花形」である。他にも第九十九図・第一百十図の松一色の立花(どちらも富春軒作)に使われている(テキスト636)。富春軒



第二十一図 テキスト No.625



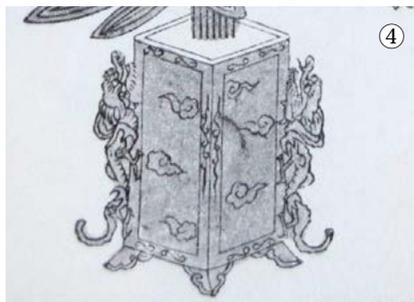
第八図 テキスト No.613

にとって特別な器の一つといえる。

図④ 龍

第八十四図(テキスト615)と共に「草の対の花」に對で使われている。

図⑥ 唐子



第五十八図 テキスト No.669



第十二図 テキスト No.622

図⑦ 卷葉(蓮?)

図⑧ 竹

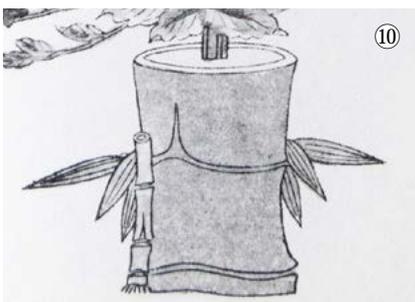
図⑨ 竹

図⑩ 竹

⑧⑨⑩図はどれも真が松の立花だが、それぞれに個性的な松なので見比べると面白い。



第八十三図 テキスト No.615・637



第四十一図 テキスト No.641

立花時勢粧の器 ③

図① 瓢箪

瓢箪は古来より縁起の良いものとされてきた。第八十五図は富春軒の合真の立花。合真は婚礼の席で立てる特別な様式で、それに相

応しい器といえる。

図② 藤の花

第十六図の立花は萱草の真。

図③ 紐

宝袋を模つたものと考えられる。第八十二図(テキスト615)と「行の対の花」に使われている。

図④～⑩ 様々な形の耳

図⑥の器は第三十九図(テキスト662)にも使われている。

図⑦の器は「耳口」と呼ばれる。帯状の耳が器の口の端から出て腰に繋がる。

図⑧は器の形も耳の形も独特で

ある。第六十三図「苔松に藤」の作者は服部三郎右門となっているが、初版では作者が書かれていない。第九十図「竹の胴」(テキスト656)と第九十八図「杜若一色の行」(テキスト663)にも同じ器が使われているが、どちら

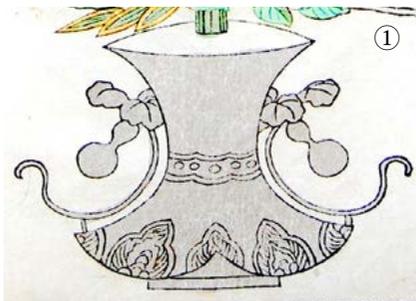
も桑原次郎兵衛作。次郎兵衛好みの器といえるか。

図⑨は富春軒作の「菊一色の行」。珍しい耳の形である。

図⑩は銀耳。「銀」は金属の輪。遊鑲と不遊鑲がある。図⑩は遊鑲。



第二十九図 テキスト No.657



第八十五図 テキスト No.675



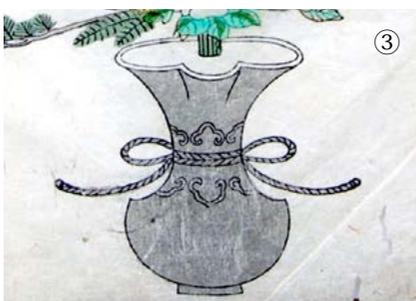
第五十四図 テキスト No.639



第十六図 テキスト No.622・668



第六十三図 テキスト No.661



第八十一図 テキスト No.615・638



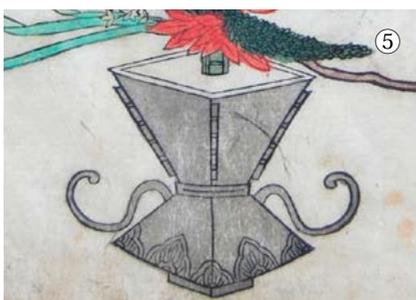
第百四図 テキスト No.672



第七十三図 テキスト No.653



第二十六図 テキスト No.663



第九図 テキスト No.622

立花時勢粧の器 ④

「立花秘傳抄四・花瓶の事」(テキスト619参照)には

「花瓶図を考ふるに、唐に花瓶と名付くる物なし。今日日本に用いる所、唐の酒器なり。」と述べられていて「唐の器」の絵が添えられている(図①)。そこで、立花瓶のルーツともいえる中国の青銅器の歴史をみてみよう。

青銅とは銅と錫の合金で、中国では紀元前2100年頃に石器時代から青銅器時代に移行したと考え



られている。紀元前1200年頃に殷(商)王朝が成立してからは、徐々に青銅の鑄造技術が発達し、その後の周、春秋時代まで(紀元前1100年頃)が青銅器時代に相当する。

殷や周の時代、青銅は貴重な金属で、王や貴族が権力の象徴として主に祭祀の器物を青銅で作った。宗廟に酒を供えるための「尊」も青銅で多く作られている。それらの表面に邪気を払い神靈との交信の場に相応しい畏怖を抱かせる獣面装飾が施されているのも特徴的である。

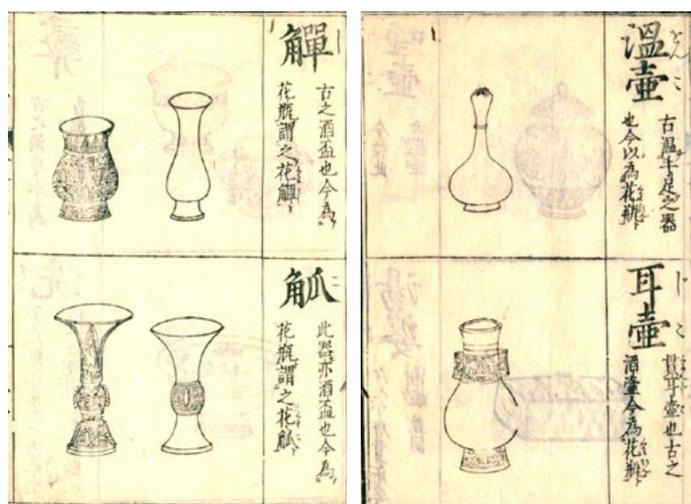
時代は下って日本の江戸時代前期に出版された百科事典「訓蒙図彙」にも「尊」や「觚」など中国伝来の器物が絵入りで紹介されている(図②)。初期の立て花はそれら中国の青銅器に立てられたものと考えられるが、尊や觚といった口の広かった酒器を選んだのは何故だろう。今では水際の美しさのためと理由を見つけることができるが、広口の器に敢えて花を立てた最初の思いがどんなものだった

たのか。もしかすると、中国で古あつたのかもしれない。代から神靈との交信に使われた祭祀用の酒器を使うことに意味が、花のルーツについて探ってみたのか。立花よりも以前、たて花が生ま

訓蒙図彙

中村惕齋によって寛文6年(1766年)に著された図入り百科事典(類書)。全20巻。

天文・地理・居処・人物・身体・衣服・宝貨・器用・畜獸・禽鳥・龍魚・蟲介・米穀・菜蔬・果蔬・樹竹・花草を絵と文で紹介している。



図②…国立国会図書館デジタルコレクションより転載



『慕婦繪々詞 卷1』より 覚如 13 歳、延暦寺の宰相法印宗澄に天台を学ぶ。

『慕婦繪々詞』

室町時代初期に描かれた『慕婦繪々詞』(1351年)には、当時の僧侶の暮らしが克明に描かれている。『慕婦繪々詞』は浄土真宗の開祖親鸞の曾孫にあたる覚如(1271-1351)の伝記絵巻。西本願寺に伝わる貴重な絵巻だが、大正時代に模写されたものが『慕婦繪々詞』として国立国会図書館デジタルコレクションで公開され、インターネットでも見る事ができるので、絵の

細部までつぶさに確認できる。

絵巻の人物一人一人の仕草や表情の豊かさに思わず見入ってしまう。衣服、食事、住まい、遊び、行事、風俗が描かれ、鎌倉時代末期から南北朝頃の様子をリアルに伺い知ることができ。

さて、いけばなの歴史から見ると、最古の花伝書とされる『花王以来の花伝書』が1486年とされるので、それより130年以上前の描写として眺めることができる。(ただし慕婦繪々詞巻1、巻7は足利義満の時代に紛失し、1482年に作り直されているので、制作年代による描写の違いがあるかもしれない)

巻8には京都大原の勝林院が描かれ、本尊の阿弥陀如来の前机に枝を挿した一对の華瓶が見える。(図⑧⑨)



③



②



④



『慕婦繪々詞 卷3』より 奈良興福寺一乗院にて法相を学び 17 歳で出家・受戒のち行寛に学ぶ。

6



『慕婦繪々詞 卷5』より 歌会を催し打聞（歌を書き留める）をして歌集「閑窓集」をつくる（正和4年）。

今でも阿弥陀如来に供える華瓶には香木としての櫛の枝を挿すが、これはその昔、瓶の中の浄水を清らかに保つ意味で花や香木で器の口に蓋をしたのが起源だそう。

巻5の歌会では板の間の奥に3幅の軸が掛けられ、それぞれの前に一對の花瓶と香炉が敷板に置かれている。真ん中の軸は歌聖柿本人麻呂だろう。広口の花瓶に生けられているのは高野槇か。（図⑥⑦）

巻1と巻3には盆石や箱庭が描かれている（図①③④⑤）。

台の上に自然の景色を再現する飾

7



り物は平安時代に「州浜」と呼ばれる貴族の間で流行した。盆石、盆景、盆栽の起源は中国だが、石や植物で神聖な空間を作ろうとする行為は、その後のいけばな誕生に繋がっていると思う。

図②の床の間には塗の台の上に青磁の鉢に紅白の花と細い葉が見える。はたしていけられたものか鉢植か。この巻1は紛失したのち1482年に描き直されている。書き直された頃にはこのような床と床飾りがあったことが想像できる。（つづく）

8



9



『慕婦繪々詞 卷8』より 貞和2年、大原の勝林院五坊を尋ねる。



①



『慕婦繪々詞 卷8』より 貞和4年(1348年)春、桜を花瓶にたて置き、善如と覚如が互いに歌を贈り合う。

『慕婦繪々詞』 つづき

仙溪

『慕婦繪々詞』(1351年)には鎌倉時代末期から室町時代初期(南北朝頃)の様子がリアルに描かれているので、その当時、花をいけることがどのようになされていたかを窺い知る手がかりになる。

巻8では、青磁の大きな花瓶に姿美しく一本の立派な桜がいけられている(①②)。覚如の孫(のちの浄土真宗本願寺派第4世宗主 善如)が、自分の数え年16歳となる日、外の強い風で散ってしまいそうな桜を少しでも長く見ていたいと手折って部屋にいたものだ。その美しさに見入る祖父の覚如。歌の中で「立て置く花」という言葉も使われている。また、卓の後ろは板戸で、軸を外して花を真ん中に置いているのが興味深い。

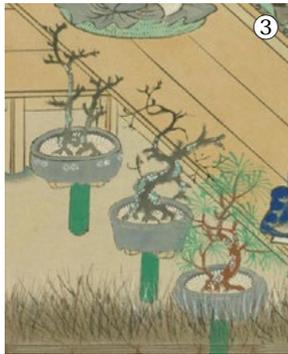
続いて巻9からは二つの場面を紹介

②

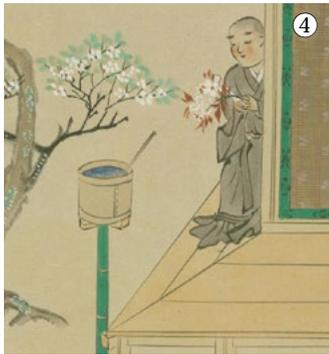


介しておこう。一つは貞和6年正月21日、13歳の若さで病没した光長(覚如の孫、善如の弟)の初七日法会の場面。縁先に青竹を立てた台に置かれた盆栽が3つ並んでいる。正月の設えか、もしくは法会の演出か(③⑤)。また、同年2月の桜の季節、後室善照尼の墓所に詣でる覚如。経木の裏に恋慕の情を歌に詠む場面では、手折った桜を手につつ若い僧の姿が(④⑥)。お墓に供える花か、はたまた覚如を慰める心遣いの一枝か。手に持つ枝をこの後どうするのか。670年前のこの瞬間に思いを馳せるのも一興である。

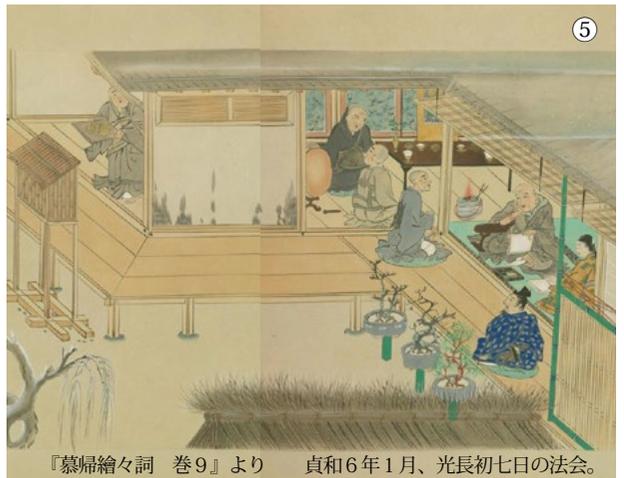
③



④



⑤



『慕婦繪々詞 卷9』より 貞和6年1月、光長初七日の法会。

⑥



『慕婦繪々詞 卷9』より 善照尼の墓参で西山久遠寺へ。





『春日権現験記 卷11』より

『春日権現験記絵』 仙溪

鎌倉時代後期の『春日権現験記絵』(1309年)もデジタルコレクション(1309年)もデジタルコレクションで横写が公開されている。左大臣・西園寺公衡が藤原氏一門の繁栄を祈願するために春日明神から受けた加護と霊験を綴った絵巻物で、当時の習俗を垣間見ることが出来る。

8世紀からの春日明神に纏わる様々な出来事が描かれているのだが、中でも奈良興福寺で行われた維摩会の描写(7⑧)が興味深い(1159年?)。講堂の三尊仏の前卓には華瓶に立てた花が供えられ、また老僧と菩薩が向き合うその前にも同じ華瓶が置かれている。そしてその菩薩像



は手に花を持ってまさに今花を挿そうとしているかのように見えるではないか。(巻11)

巻15には、部屋の隅に紅葉した楓の枝が挿された青磁の花瓶が見える。時は元仁元年(1224年)11月、夢の中に鹿が現れて病が癒え、大切な仏事を遂げることができた僧の話だ。鹿は春日明神の使いであり象徴として描かれているが、目を引くのは花瓶に挿した楓だ。

遡って描かれた絵巻の描写はそれぞれの時代を正確に描いていないかもしれないが、少なくとも鎌倉後期にどのように花瓶に花が挿されていたかを考える貴重な資料である。



『春日権現験記 卷15』より

中乃らう正實尊寺勢乃時彼理自代
小し紀伊寺、寺乃老の有れれ天小
鏡志て貴賤おほく誠死忘言乃小
寺主寺家乃沖乃老也て人にも
次下人一人小をを、志願直て天井乃
をほめ乃中乃法泉房といふ乃
有字乃兒と志、世々者たはく乃
小房中煙をそ乃子と、乃乃



絵巻に見る挿花

仙溪

『慕帰絵詞』と『春日権現験記絵』で、鎌倉末から室町初期のおもに仏門での挿花の様子を見てきたが、もう少し時代を遡ってみよう。



出典：『続日本の絵巻8 華嚴宗祖師絵伝』中央公論社

老若の僧たちに金剛三昧経について講義する元暁(617～686)。後方の壇には青いガラスの瓶に花が挿してあり隣に香炉が置かれている。仏の崇高な教えに浸り、真理を深く悟るための道案内として、香を焚き花瓶に花を挿しているように感じられる。



出典：『続日本の絵巻8 華嚴宗祖師絵伝』中央公論社

新羅の学僧、義湘(625～702)は船で唐へ渡り、長安をめざす。ここには義湘が途中で立ち寄った長者の屋敷の様子が描かれている。深く仏教に帰依しているのだろう、机には經典が置かれている。侍女が花を挿した花瓶を持っているが、花瓶の口の形が花の形をしているところは、図③の花瓶と同じである。この絵の右には、長者の娘・善妙が、義湘に恋慕の思いを告げる場所が描かれている。

絵巻では、恋心を深い信仰心に昇華させた善妙が、自ら海に身を投げて龍となり、新羅へ戻る義湘の船を守るというドラマチックな場面がつづく。

『華嚴宗祖師絵伝』

鎌倉初期の建永元年（1206）に京都梅尾の地に高山寺を建てた明恵上人高弁（1173～1232）が華嚴宗を広めたい一心で描いたとされる。朝鮮半島、新羅国の華嚴宗の祖師である義湘と元暉の物語絵巻である。

ここにも異国のことではあるが、寺院における挿花の様子が窺える。

図①には青いガラス瓶に花が挿されており、その横に香炉も見える。場所は新羅。

図②の場面は中国（唐）のとある港町にある長者の屋敷。女主人の前に侍女が花を挿した花瓶を指し出す。机には盆石と香炉も置かれている。

図③は立派なお堂での講説に人々が集まる場面。お堂の正面に蓮の花と葉が挿された一対の花瓶と香炉が置かれ、女性が供花を捧げ持っている。場所は新羅の浮石山寺。

明恵上人自身は唐への留学を果たせなかったため、上人が実際に見てきたわけでは無いが、これだけの描写の元となる知識は持ち合わせていたと推察する。少なくとも明恵上人の時代の彼の地の描写と見ても良いだろう。

古代の中国や朝鮮において、挿花がどの様で



出典：『続日本の絵巻8 華嚴宗祖師絵伝』中央公論社

唐で学び、新羅に戻った義湘が、浮石山寺にとどまって華嚴の教えを広めるため講説している場面。ハスの花と葉が幾本も挿された花瓶は白磁だろうか。他にも供えるための切り花を手を持つ女性が二人。一方は籠のようで、一方はガラスの鉢に見える。華嚴経は4世紀頃インドでまとめられ、その後中国の杜順（557～641）が華嚴宗を開いた。日本では義湘たちの後に唐で学んだ新羅の僧、審祥（生没不明）が736年に招かれて華嚴経の講義をし、感動した聖武天皇は東大寺に大仏を造ることになる。今も東大寺は華嚴宗を伝えている。そもそも華嚴という名前には「花で荘厳された教え」という意味が込められている。



出典：<https://benrido.co.jp/wp-content/uploads/2014/07/nenbutu.gif>

バショウの葉を光背に、釈迦如来のポーズでハスの葉にカエルが座る。前机の花瓶に3本のハスの花が立てられている。ガラス瓶だろうか。茎が透けているようにも見える。一つ気になるのは、前後の場面を見ても香炉が描かれていないこと。蓮の花の香りが代わりになるという心だろうか。又はこのような形式もあったのか。ひょっとして型にこだわり心を忘れることへの諷刺か。識者の解説をお願いしたい。



出典：『日本の絵巻6 鳥獣人物戯画』中央公論社

カエルがハスの蕾をうやうやく捧げ持つ。猿僧正への供物だろうか。ハスの茎には念珠が掛けられている。仏教においてハスの花は特別な存在なのだ。

あったかを知ることは、いけばなが生まれる背景を想像する上での手がかりになるだろう。室町時代の「立て花」誕生の瞬間に思いを馳せるには、祈りの場における花について、そのルーツを知っておきたい。

『鳥獣人物戯画』

さて、明恵上人が建てた高山寺には『鳥獣人物戯画』も流転の末に伝わっている。蛙や兎が滑稽に描かれた絵巻だが、ここにも挿花の描写が見える(図④)。

『鳥獣人物戯画』は鳥羽僧正覚猷(1053~1140)ほか数名によって平安時代末期から鎌倉時代初期に描かれたとされている。平安末期には、仏の前に蓮の花を挿した花瓶

を供えることが仏事の決まり事であったことが想像できる。

6世紀に仏教が伝えられて後、多くの僧が仏の教えを学びに大陸を訪れ、様々な文化を持ち帰っている。それらは少しずつ根付き、又すこしずつ変化もしただろうが、元々の大陸での挿花がどんなものだったのか、もう少し探してみたい。

仏教遺跡に見る花と瓶

仙溪

インド↓中国↓日本という仏教伝来の流れの中で、花と器について探ってみよう。

インドのアジヤンタ石窟寺院には6世紀頃の極彩色壁画が残る。日本に現存する最古の仏教絵画である法隆寺金堂壁画（奈良県斑鳩町・7世紀末）は、アジヤンタの壁画を模したものと

の説がある。（様式的には中国敦煌の莫高窟などにみられる初唐絵画の影響を受けている）

そもそもインドにおける祈りの場では、花は器に挿すのではなく、香りの良い花を摘んで糸で綴ったり、器に盛ったり散らしたりして供えられる。良い香りには悪を遠ざける力がある。図②でも菩薩の左後ろで蓮（もしくは睡蓮）の花を盛った盆を持つ人が描かれている。

泥の中から伸びて美しい花を咲かせる蓮や睡蓮は、仏教においては悟りの象徴とされている。図①の菩薩も、悟りを得た者の証として蓮（もしくは睡蓮）の花を手に持っている。

図③の菩薩は2種類の花を持っている。詳しくは不明だが、大きい方は白花の熱帯睡蓮か。小さい方は丸い白色5弁花で、同じく熱帯の水生植物ではないかと思う。様々な花に、悟りの開花を託していたのだろうか。



出典：<https://www.ana.co.jp/travelandlife/feature/original/vol122/>



出典：<http://double-dolphin.blogspot.com/2015/12/photography-inside-ajanta-caves-tips-and-tricks.html>



出典：<http://kuradashieigakan.com/con34ajanta/ajanta3.htm>

インド、アジヤンタ石窟寺院は虎狩りに来ていたイギリス人によって1819年に発見された。紀元前1世紀〜紀元後2世紀と、5世紀後半〜6世紀に開窟された僧堂と祠堂（仏塔をまつる）からなる仏教窟。図①②は第1窟（6世紀頃）の蓮華手菩薩（図①）と金剛手菩薩（図②）。図③は第11窟の蓮華手菩薩。

インドで生まれた仏教は各地に広まって行く。そもそもインドでは釈迦の入滅後、長い間仏像は造られなかったが、紀元後100年前後に、北インドのマトウラーとインド北西の王国ガンダーラで、最初の仏像が造られるようになった。

ギリシャ・ローマ美術の影響を受けていた中央アジアの民が、すでに仏教の栄えていたこの地域を治めたことで、仏教の内容が仏像として造形化されることとなったのだ。

図④はガンダーラから出土した2〜3世紀の菩薩像で手に水瓶を持っている。菩薩とは更なる



出典：[http://avantdoublier.blogspot.com/search/label/ 仏教美術?updated-max=2014-09-26T05:02:00%2B09:00&max-results=20&start=15&by-date=false](http://avantdoublier.blogspot.com/search/label/仏教美術?updated-max=2014-09-26T05:02:00%2B09:00&max-results=20&start=15&by-date=false)

彌勒菩薩坐像 2〜3世紀 ガンダーラ出土 松岡美術館蔵（仏教の来た道シルクロード探検の旅展図録より）

る悟りを得るために修行している人をさすのだが、この像は未来で仏になることを約束された彌勒菩薩と考えられている。彌勒には慈しみという意味があるそうだ。優しいお顔である。

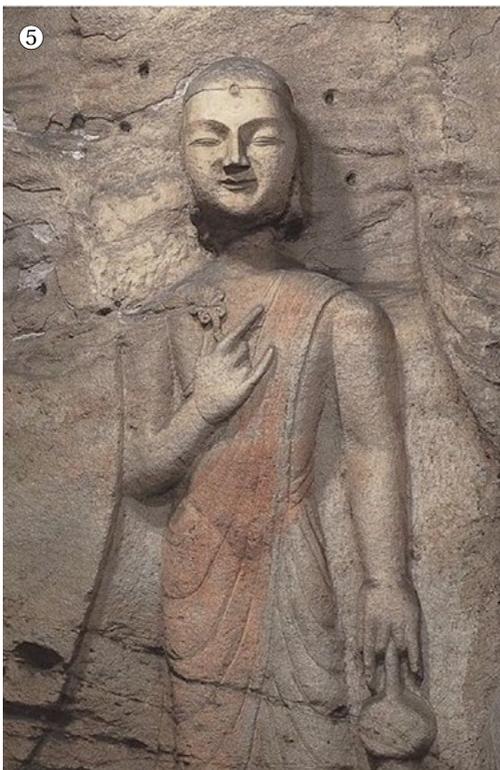
さて、水瓶は修行者の大切な持ち物であり、中の浄水や香水を清らかに保つために、花や木で瓶の口に栓をしたと聞いたことがある。

釈迦の弟子が水瓶と花を持つ姿で彫られた像も、中国の雲崗石窟に残っている（5世紀後半図⑤）。
良い香りのする水と良い香りのする花を持つ

て、釈迦の教えを広め歩く弟子達の姿が目につかぶ。水も花も修業に欠かせないものであり、また釈迦の教えによって人々の苦しみを和らげるための大切な役割があったのではないだろうか。

この水瓶もしくは花を持つ姿は、多くの菩薩像に見られるが、中には手に持った水瓶に花が挿された像も現れる。

インドでは花だけを摘んで供えていたものが、いつしか花瓶に花を挿して供えるようになったのは、気候と植生の違いも関係したと考えら



出典：http://arts.fgs.org.tw/fgs_arts/tw/pic_image_show.php?arg=FxFCWcoCwwZ5LqpsJgnd9EtatR38Zg

中国山西省大同市の西方にある雲崗石窟は5世紀後半の石窟寺院。第18窟の弟子像は左手に水瓶、右手に花を持つ（図④）。

れる。今もインドの女性はジャスミンの髪飾りを好んで身につけているが、花は摘むもので、花もそれに応える強さを持っている。中国や日本の花とは性質が異なる。

仏教はインドから中央アジアを経て敦煌へと伝わり、中国に広まることになる。敦煌は中国の西の玄関口。東西交易の要衝として栄えた砂漠のオアシスだ。

図⑥は敦煌・莫高窟の壁画である。左手に水瓶を持つ観音菩薩で、煌びやかな天蓋や瓔珞が目を引く。

消えて分らないが、右手には蓮華を持っていると想像したい。やがて悟りを求める心の象徴として、慈愛に満ちた導きの頭れとして、水瓶に蓮華が立てられて、日本の供花となり、いけばなへと繋がって行く。そんなことを空想している。



出典：<http://avantdoublier.blogspot.com/search/label/敦煌?updated-max=2012-12-18T05:02:00%2B09:00&max-results=20&start=30&by-date=false>

敦煌莫高窟 第45窟 南壁中央壁画。盛唐・開元年間（713〜741年）。水瓶を持つ観音菩薩。右手にも何か持っていたのかは消えていて分からないが、蓮華が持たれていたのではないだろうか。

仏教遺跡に見る花と瓶 ②

仙溪

建てた。またこの時代に多くの宗派も誕生する。

中国地域への最初の仏教伝来は1世紀頃だが、本格的に広まるのは4世紀以降で、5世紀の南北朝の時代には南北ともに多くの仏教寺院を建て、龍門や雲岡などの石窟寺院もつくられた。

そして7世紀、唐の時代。仏教が国による制限を受ける中、国禁を破って玄奘三蔵がインド(天竺)へ旅に出て多くの仏典を請来したことがその後の東アジア仏教の基盤となった。

6世紀に入ると内乱による廃仏廃寺の苦難の時を経た後、中国統一を果たした隋の文帝は新たに仏教で国を治めるべく中国全土に舍利塔を

日本には538年(552年説もある)に百済の聖明王から欽明天皇に仏像などが贈られたのが最初の仏教伝来とされている。



出典：<http://art.ifeng.com/2017/0731/3363934.shtml>



出典：<http://art.ifeng.com/2017/0731/3363934.shtml>



出典：<https://kknews.cc/zh-cn/travel/r9394n.html>

中国、洛陽の南方にある龍門石窟は南北朝時代の5世紀末から400年にわたって造営され、約10万体の仏像がある。北魏の孝明帝の時代に造られた皇甫公窟(527年完成)には、花瓶(?)に蓮の花と葉が立てられた浮彫が。器の下にも茎の足のようなものが見える。空中を漂っているようだ。

皇甫公窟は北朝・北魏の孝明帝(在位515~528)とその皇后のつくった一对洞窟。壁面には多数の仏龕をうがち、三尊仏、小仏、飛天、眷族(皇帝の一族)などが彫られて、全体で一つの物語を見ているようだ(図②)。図③は蓮の花を持って進む皇族たちか。

その200年後、華嚴經（仏教経典の一つ）に感銘を受けた聖武天皇が、東大寺大仏開眼供養を果たす。

そもそも積尊の悟りは一つでも、教えを請う相手に合わせて様々に発せられた言葉が、弟子達によって解釈され口承され、のちに多くの経典となった。そして各地に伝わる過程においても、それぞれの民族的な背景によって、微妙に受け止め方や表現の仕方は変化する。

中国においても、朝鮮、日本においても、仏教伝来は在野の信仰、思想、慣習とのせめぎ合いと融合があったと考えられる。

ネットで検索するうちに、ある画像に目が釘付けとなった。なんと花瓶に蓮が生けられたレリーフが6世紀初頭の中国石窟に！（図①）。

色々調べると、すでに古代インドで、命の源泉である水が貯えられた壺から蓮が生え出る「満瓶」と呼ばれる装飾文があり、宇宙の生成、豊穡多産を現すそうだ。

図①の器は「尊」に似ている。尊は古代中国で歴代の王が祖先の廟に酒を供えた祭器であることを思えば、蓮の咲く天界に先祖と共に再生し、一族の繁栄を願う気持ちが読み取れる。

この蓮を挿した（ように見える）図像は、法隆寺金堂天井等の装飾や（図⑤）、東大寺大仏開眼供養の花瓶（図⑥⑦）などに繋がっているように、やがて日本のいけばなへと結びつく痕跡の一つを発見した思っている。

いろいろな開花の状態が彫り分けられている。中央の蓮の花には火焰宝珠のような中に小さな仏が乗っている。



出典：http://artifeng.com/2017/0731/3363934.shtml

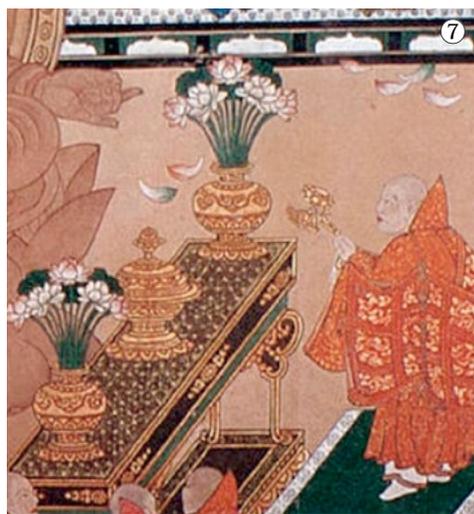
法隆寺金堂西の間天蓋内部の火焰宝珠を戴く蓮唐草文。国宝法隆寺金堂展図録より。



出典：http://avantdoublier.blogspot.com/2014/09/blog-post_26.html



出典：https://www.wikiwand.com/ja/東大寺盧舎那仏像



出典：https://www.wikiwand.com/ja/東大寺盧舎那仏像

奈良の華嚴宗大本山東大寺に伝わる「東大寺大仏縁起絵巻」（1536年）は3巻からなり、東大寺の創建、大仏の鑄造、開眼供養や鎌倉時代の再建の様子などが描かれている。開眼供養の場面には蓮の花と葉（の造花）が挿された一対の金銅の花瓶を見ることができ、752年4月9日の様子だが、太陽暦でいうと5月26日で、ハスの開花には一月早い。

古代インドの蓮のイメージ

仙溪

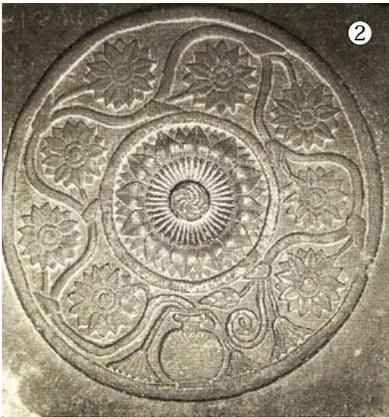
ハス（蓮）は「泥より出でて泥に染まらず」と言われるように、ハスは清浄と不浄が混在する中における悟りの象徴という清らかなイメージがあるが、そもそも仏教が伝わってゆく過程で、ハスがどのような意味を持ったのかを探ってみよう。

まずはインドの古代遺跡にハスが登場する。釈迦の死を「涅槃」というが、涅槃とはあらゆる煩惱が消滅し、苦しみを離れた安らぎの境地、悟りの世界のことをさす。インドにおいては涅槃の象徴として、釈迦の遺骨（舍利）を祀るス



出典：『仏教美術のイコノロジー』宮治昭（吉川弘文館）

壺に満たされた生命の根源としての「水」からハスが生え出る様子。誕生と生成の模様で「満瓶（プールナ・ガタ）」と呼ばれている。パールフト遺跡（インド中部）。



出典：『仏教美術のイコノロジー』宮治昭（吉川弘文館）

丸い壺から出る蓮華蔓草が、中央の開花した蓮華を一周している。ハスの花は太陽の花であり、生命の花であり、増殖の花である。パールフト遺跡（カルカッタ・インド博物館）。



出典：『仏教美術のイコノロジー』宮治昭（吉川弘文館）

マカラ（インド神話に登場する怪魚）の口から発する蓮華蔓草。サンチー遺跡、第一塔東門。

トゥーパ（舍利塔）を建て、信仰の拠り所とした。ストゥーパは丸い鉢を伏せた形をしていて、そこに納められた舍利は「種子」、それを覆う鉢は「子宮」や「卵」と同一視され、万物が生ずる宇宙の始原的な意味合いを持つ。

ストゥーパの周囲は石の門や玉垣で囲われ、それらに釈迦にまつわる物語が彫られている。また力強い生命力を表現した様々な装飾も彫られているのだが、煩惱の無い生命の輝きそのものとして、ハスの模様が多く見られる。

ハスは水から生まれ次々に花を咲かせ、その地下茎は水面下で網のように伸び広がる。根茎を二股に枝分かれさせながら節々から葉や花を生じるハスの生命力に、古代インド人は魅了さ

れた。

図①の浮彫は蕾、開花、実、葉が生き生きと表現されて、まるで蓮一色のいけばなのようだ。しかしこの丸い壺は生命が生まれる根源としての「水」の表現であって花器ではない。壺に満たされた水からハスが生え出る様子を表している。古代インドで大層好まれた誕生と生成の模様で「満瓶（プールナ・ガタ）」と呼ばれている。

また、ハスの茎を波状に表して、節々から枝分かれしながら花、葉、水鳥などで埋め尽くす「蓮華蔓草」は、生成と増殖を象徴する重要な装飾文である。（図②③）

インドにおける誕生、生成、増殖の象徴としてのハスは、やがて中央アジアや中国では別の意味を持つことになる。

参考図書：『仏教美術のイコノロジー』

宮治昭著（吉川弘文館）

古代インドの聖樹信仰

仙溪

仏教がインドからガンダーラ、中央アジア（敦煌）を経て中国へ伝わり、その後日本に来るまでに、ハス（蓮）に対するイメージがどのように変化してきたのかを知りたいと思った。そうすれば仏前供花のルーツに辿り着き、花瓶に花を挿す行為のはじまりの一つを見つけれられるかもしれない。

そもそもインドでは植物に対してどんな思いがあったのだろうか。

仏教が生まれた古代インドでは、まず樹木に対して特別な思いがあったようだ。

いったん葉を落として死んでも再び葉をつけて生き返るところに、神秘的な生命力、尽きることのない創造力を感じ取っていた。そして繁殖力の旺盛な特定の樹木が聖樹とし

て崇拜された。

写真①は生命の樹「如意樹」を表す柱頭彫刻で、中インドのベールナガルで発見された紀元前2世紀頃のもの。バンヤン樹（ベンガルボダイジュ）の枝から財布や果実、蓮などが垂れ下がる。願いのものを与えてくれる樹だ。

古代インドではもともと聖樹に対する民間信仰があり、人々が行っていた供養の仕方「焼香」「燃燈」「散華」「伎楽」などが、そのまま仏教においても引き継がれている。

さらに詳しく云えば、香・華・塗香・燃燈・幢幡・傘蓋・五指印（掌印）・音楽・右繞（右周り）などの供養法は、聖樹（の祠）に対して行っていたものが、舍利を納めた仏塔（ストウーパ）に対しても同様に行われるようになった。

初期の仏教美術において釈迦の伝記を彫る時に、釈迦は釈迦の居場所である樹木で表現され

ていた（写真②）。釈迦の生涯と関係の深い聖樹で釈迦の存在を表すことで、誕生、成長、増殖、死滅、再生という生命の循環をつかさどる宇宙の真理を悟った釈迦と聖樹を重ねたのだろう。

仏教の根底に古代から続くインドの聖樹信仰があることは、今日の私達のいけばなとも深いところで繋がっている気がする。

聖樹の元では人も動物も植物も平等にその恵みを授かる。人は生きとし生けるものと共にあり、その長としての樹木を畏怖し尊ぶ心は、私達が花をいけるときにも持っていたと思う。

いつか、どこかで、古代インドの聖樹信仰に影響を受けて、植物に対する尊厳の心から、水の入った器に花を挿した僧侶がいたのかもしれない。

インド人の植物に対する思いに学ぶのも、今の私達にとって、大切なことではないかと思う。

①



カルカッタ・インド博物館入口の如意樹
出典：http://kosoken.blogspot.com/2015/01/blog-post_20.html

②



エーラパトラ竜王の礼拝
紀元前1世紀初 パールフット出土
インド博物館蔵
聖樹と台座で釈迦（ブツダ）を表している。
出典：https://www.waseda.jp/flas/rilas/assets/uploads/2016/10/Rilas04_291-301_Tadashi-TANABE.pdf

インドボダイジュ

学名：Ficus religiosa

英名：bodhi tree pippala tree

クワ科・イチジク属の高木。樹皮や根皮などを薬用とする。



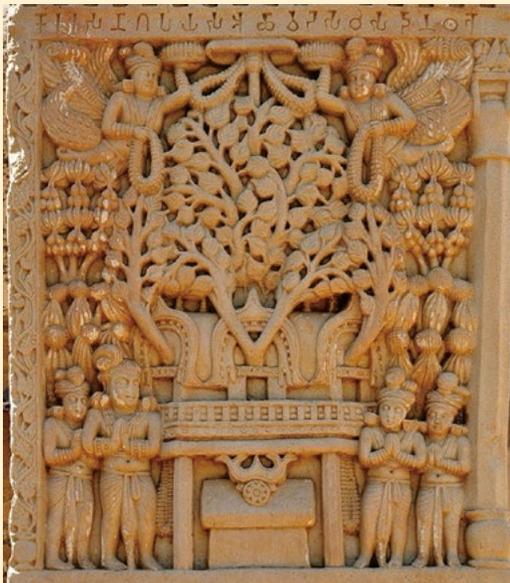
信仰を集める樹齢 140 年のインドボダイジュ。ブッダガヤのマハボディ寺院。
出典：https://tricycle.org/magazine/bodhi-tree-tlc/



出典：https://china.desertcart.com/products/139063302-pmw-peepal-tree-fruit-powder-sacred-fig-raavi-100-goose-packed-loose-pa



出典：https://astrotalk.com/astrology-blog/why-is-peepal-tree-worshipped/



サーンチー遺跡のレリーフ。紀元前 3 世紀にアショーカ王がブッダガヤに建てた寺院とボダイジュ。西暦 1 世紀。

出典：https://www.wikiwand.com/en/Bodhi_Tree

仏陀ゆかりの三聖樹

仙溪

インドの聖樹（聖木）にはどのような木があるのだろうか。仏教とゆかりのある木について見てみよう。
お釈迦様の生涯と深く関わりのある木は次の3つ。

菩提樹 インドボダイジュ
沙羅双樹 サラノキ
無憂樹 ムユウジュ

釈迦は長い遍歴と苦行の末に、ウ

ルヴェーラ村（今のブッダガヤ）で一本のインドボダイジュの下に座し、49日間瞑想して真の悟り「菩提」を得た。

太古よりインドボダイジュは大切な樹木であったようだ。インダス文明の遺跡から、その葉が描かれた陶器が見つかっている。葉、樹皮、根に様々な薬効があり、ヒンズーの主要な三神が棲む木でもある。

インドの国樹になっているくらい大切な木なのだ。クワ科イチジク属の高木で、花は見る事ができず、枝に直接小さな

実ができる。ハート型の葉が風にパタパタと揺れる音がなんとも心地よいそうだが、釈迦もそんな音を聞きながら瞑想していたのだろうか。

中国、日本でこの木は育たない。代わりにシナノキ科のボダイジュが寺院に植えられている。こちらは中国原産の落葉高木で、日本には栄西禅師が宋から種子を持ち帰った。

釈迦は45年の間、数百キロの道を何度も行き来して説法を続け、80歳で亡くなる。終焉の地、クシナガラ川辺にある2本のサラノキの下で



儀式で使用された陶器のハート型の葉模様。B.C.2600-2450。

出典：https://ja.wikipedia.org/wiki/インダス文明#/media/ファイル:Ceremonial_Vessel_LACMA_AC1997.93.1.jpg





①と㊦ 出典：<https://www.yamakei-online.com/yama-ya/detail.php?id=677>



涅槃。ガンダーラ、ロリヤン・タンガイ遺跡。2～3世紀。インド博物館（カルカッタ）。

出典：https://www.pinterest.jp/pin/389772542744921786/?nic_v2=1a2b00xfl

サラノキ

学名：Shorea robusta

英名：Sal tree

フタバガキ科・サラノキ属の高木。3月頃、葉の生え替わりと共に、淡いクリーム色の小さな5弁花が無数に咲く。花には芳香がある。



出典：<http://www.flowersofindia.net/catalog/slides/Sal.html>

釈迦が息を引き取ると、サラノキは時ならぬ花を満開に咲かせ、釈迦の体の上にその花を降り注いだという。サラノキはフタバガキ科の高木で、材は堅くて耐久性があり、様々に利用されている。落ち葉は草の茎で綴り合わせて丸い葉皿として使われる。

幹から採れる樹脂（ドゥーナ）は様々に利用され、燃やして出る良い匂いの煙は病原菌を殺して辺りを浄化するといわれている。そして春に咲く花にも芳香がある。釈迦がこの木の下を選んだのもなんとなくわかる気がする。



出典：<https://explorepharma.files.wordpress.com/2010/10/ashoka.jpg>



釈迦誕生。ガンダーラ、ロリヤン・タンガイ出土。2～3世紀。インド博物館。

出典：https://www.pinterest.cl/pin/AX0815eKMSm7yu8uWT-JzMV1xyS8-Mt049tKRfOXzzvWLUXoRwCOLJs/?nic_v2=1a2b00xfl

ムユウジュ

学名：Saraca asoca

英名：Asoka tree, Sorrowless tree
マメ科・ムユウジュ属。細長い葉の常緑小高木。3月頃に美しいオレンジ色の花（萼）が咲く。



出典：<http://medicinplants.blogspot.com/2008/08/ashoka-tree-sorrowless-tree.html>

日本ではツバキ科のナツツバキやヒメシヤラが沙羅双樹として植えられている。
ムユウジュはインドでアショウカと呼ばれるが、「ア（無い）」「ショウカ（悲しみ）」から無憂樹の字が当てられた。釈迦の母マーヤーがルンビニーの園でこの木をつかもうとしたときに、右脇から男の子（のちの釈迦）が生まれたとされる。

伝承によると誕生してすぐに七歩あゆみ、自ら偉大なることを獅子吼し、温冷二水によって身を清められた（灌水）とあり、その様子はのちに石に彫られ、仏伝のワンシーンとして今に伝わる。
ムユウジュはマメ科の常緑小高木で、春の暖かさを象徴するような黄色から赤色の花を咲かせる。釈迦が世に現れる場所にふさわしい、優しい葉と温かな花色を備えている。

大乘仏教「自己救済を主眼とする原始仏教に対し、広く衆生を救済しようとする新しい仏教思想。クシャーナ朝時代にインド北西部で生まれ、中国、朝鮮、日本に広がった。

壁画に描かれたハスと瓶

仙溪

仏教誕生以前より、古代インドではハスを生命そのものの象徴としてとらえていたことや、強い生命力を持つ聖樹に対する信仰心があつたことを、前号まで見て来た。では、古代インドでのハスに対するイメージは、仏教が伝わる中でどのように変わっていったのだろうか。

① ヒンズー教の神話でも、ビシュヌ神の臍から生じた蓮華の上にブラフマーがすわって宇宙を創造した話があるが、水から生まれるハ

スに、無から出現する世界、宇宙を重ねていたことがうかがえる。何かハスから生まれるというイメージは仏教の経典にも様々な形で引き継がれ、また新たなイメージも加わって行くこととなるのだが、詳しいことは一旦置いておき、まず中国の西の玄関口、敦煌ほかの壁画から、いけばなの観点で見て絵の中のハスの気になるものはいくつか紹介してみよう。

② 大乘仏教において出家者の大切な持ち物の一つに水瓶がある。菩薩がよく手に持っているのも水瓶で、修行中である菩薩が持っているのは頷ける。図①は菩薩が右手

に持った水瓶に花が挿されているように見えるが、水瓶は浄水や香水を入れる容器なので、悪い物が入るのを防ぐために花で口に蓋をすることもあつたようだ(図②)。はたして図①の花も蓋として描かれているのだろうか。

③ また、花を挿したように見えるガラスの器を持つ菩薩の絵(図④)もあつたが、古代インドでは生命の源としての水を壺で表現し、そこからハスが生まれ出る図像(満瓶と呼ばれる)もあつたので、循環する生命そのものを表現しているのかもしれない。このガラスの器と花にどんな意味があるのだろうか。



①

大勢至菩薩立像(絹本設色)。敦煌莫高窟。(唐代)。ペルシャ製の銀製壺のような瓶にハスが挿されている。出展：<https://kknews.cc/culture/5bp4e81html>



②

唐の太宗・李世民的五女、李麗質(621～643)の墓の壁画に、ハスの花を挿した瓶を持つ侍女が描かれている。西安の北西に位置する昭陵にある。出展：<https://kknews.cc/zh-my/history/5o23jn8.html>



③

ガラス碗を手に蓮を養う菩薩。敦煌莫高窟 328 窟壁画。盛唐(713～765年)。出展：https://spc.jst.go.jp/experiences/change/change_1719.html



④

ガラス碗を手に蓮を養う菩薩。敦煌莫高窟 196 窟壁画。中唐(766～835年)。出展：<https://kknews.cc/culture/5bp4e81.html>



張世卿墓の壁画
前室4面の壁画(図①~④)

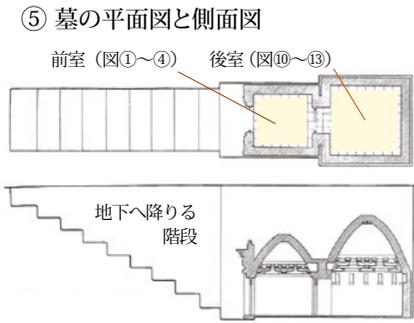


後室、天井中央の蓮華模様の周りには星座図と散華が描かれ(図⑥)、梁の下に蓮華台座と蓮の葉にはさまざまの長方形の凹みがあり、その間に瓶花が供花として描かれている(図⑦⑧⑩⑬)。その数18。生前に彼が行った供花の功德を表したものでしょうか。そうすると凹みにはそれぞれ



参考：学習院学術成果リポジット
論文「宣化地方遼時代張世卿壁画
墓に描かれた器物」李含

れ仏像があったのかもしれない。青い花瓶にハスの花と葉が見える(図⑦)。他の木や花は何だろう。描かれている情景が興味深い。朝、屏の外から侍従が入ってきて読経の用意を始める(図⑩)。机には経箱と經典、茶、香が用意され、そして今まさに瓶花を供えようとする男性の姿が(図⑨⑩)。さらにお茶を準備する場面(図⑫)、夜にお酒を用意する場面が続く(図⑬)。なんて和やかな雰囲気なのだろう。こんなお墓があったとは。九百年前、熱心に花をいけて精進を重ねた張世卿という人がいたことを、壁画は私達に教えてくれている。



出展：①~⑬
<https://artouch.com/views/content-280.html>

中国「遼」の壁画墓
仙溪

遺跡の壁画を調べていたら、花瓶に花を挿した絵がいっぱい出てきて驚いた。日本の平安末期にあたる西暦一一六六年に造られた、中国宣化地方の豪族の墓である。

中国では唐が滅び、五代十国の時代を経て宋の時代へ。唐時代の国際色豊かな王朝文化から、宋時代の自由な庶民文化へと変わってきた頃である。

その辺りは遼(内モンゴルを中心中国の北方を支配した国)の統治下であり、農耕地でありながら遊牧民の影響を色濃く受けた地域だ。そんな土地の漢民族の豪族、張世卿という人の墓である。

張世卿の墓は地下に穴を掘って造られている。階段を降りて行くとき、前室があり、その奥に棺が置かれた後室がある。すべて煉瓦で造られ、白い漆喰が塗られている。そして色鮮やかな壁画が描かれている。

墓誌によると張家は代々農業に従事し、地主として土地を賃貸しながら果物を栽培し家財を蓄え、天災の年でさえ粟を献上し、民衆に与えたため官位を拝領したとある。

そんな中でも張世卿は自らよく働き、当時の道教に憧れ、儒学を崇め、仏教を敬い、多くの人から慕われる人物であったようだ。

彼は仏への供花のために珍しい花を育て、特別に花瓶まで造らせた。その花の種類は百を超え4万本に至り、五百個の瑠璃瓶(ガラス花瓶)



後室4面の壁画(図⑩~⑬)

スリランカのガードストーン

仙溪

古代インド人は宇宙の生成や豊穡多産を、壺から蓮が生え出る図像に託していた(写真①)。その命の源としての壺のイメージは、その後どのように展開してゆくにいったのか。

インドの南東にある緑豊かな島国、ス



① プルナガタ(満瓶)のレリーフ。南インドアマラパティ仏教遺跡。紀元前2世紀頃。
 出展: https://vmis.in/ArchiveCategories/collection_gallery_parent/page:3?id=491&siteid=160&minrange=0&maxrange=0&count=24

上座部仏教⇨南伝仏教
 テーラヴァーダ(長老の教え) 仏教。釈迦の戒律を厳格に守る保守的な仏教。スリランカ、ミャンマー、タイ、カンボジア、ラオスに伝わる。

リランカには紀元前3世紀に仏教が伝えられ、現在も人口の約7割が仏教徒である(上座部仏教)。

壺を持ち生命を活気づかせ、豊穡と繁栄を約束しつつ聖域を守護してくれている、そんなイメージが湧いてくる。

スリランカ北部の都市アマラダブラにあるアバヤギリ大塔(写真②)は、紀元前1世紀建立の仏塔で、5世紀初めには5千人の僧がいたことが中国仏教僧法顕の『仏国記』に無畏山寺の名で記されている。当時は大乘仏教の研究もする仏教世界の中心的研究機関であった。

古代スリランカの仏教寺院遺跡には特有の装飾として、ムーンストーン(サンダカダパハナ)とガードストーン(ムラガラ)がある(写真⑥⑦⑧)。寺院にはこの半円形のムーンストーンの上を裸足で通ることになる。神聖な領域に入るための襪ぎの役目があるのだろう。そのムーンストーンの両側にあるのがガードストーンだ。

この生命が生まれ出る壺はプルナガタ、又はプルナカラサと呼ばれ「満瓶」と訳されているが、プルナ(満たされた、豊穡、無限)のガタ(もしくはカラサ⇨壺)なので「豊穡の壺」「繁栄の壺」と呼んでもいいだろう。スリランカではブンカラサと呼ばれ、現在も幸運と豊かさのシンボルとされている。

仏塔(ツトゥーパ)に至る道の両側には、石で造られた壺が置かれ(写真③④)、壺から様々な動植物が生まれ出る石の浮彫が参拝者を出迎える(写真⑤)。

全身を宝飾で着飾った男性が片手に発芽する枝を持ち、もう一方の手には壺を乗せている。この像は蛇神王ナーガラージャで、頭の後ろに頭が7つあるコブラが見える。(写真⑧)

古代インドで生まれた「満瓶」のイメージは、微妙に変化しつつそれぞれの仏教国に引き継がれて行った。

「壺」は水の象徴であり、水は生命の源と考えると、生命世界の母胎をイメージして造られた仏塔の入口に相応しい。

蛇神ナーガは地底世界を統治し水や雨とも関係が深い。仏教でも釈迦が瞑想している間、ムチャリンダというナーガラージャが嵐から釈迦を守ったという。

壺がもつ生命世界の母胎としての観念を、一筆道家として見直してみたい。



② アムラダブラのアバヤギリ・ダーガバ(大塔)。紀元前1世紀。この高さ75mの大塔は、かつて高さ110mのドームで覆われていたそうだ。



③ ④ ⑤ 参道には石の壺や壺から動植物が生まれ出るレリーフが見られる。
 出展: ②~⑤ https://www.tripadvisor.jp/Attraction_Review-g304132-d3600154-Reviews-or15-Abhayagiri_Dagaba-Anuradhapura_North_Central_Province.html#photos:aggregationId=101&albumId=101&filter=7



⑦



⑥

スリランカ北中部の古都、ポロンナルワの仏教遺跡群の1つで「ワタダーゲ」と呼ばれる仏塔跡。元々はドーム状の屋根に覆われており、中央の仏塔を4体の座像仏が囲む。四方に門があり、それぞれの階段下に半円形のムーンストーン（サンダカダパハナ）と一对のガードストーン（ムラガラ）が置かれている。12世紀頃の造立とされる。密林に埋もれていたのを19世紀に発見された。半円形のムーンストーンには蓮華の周りに唐草、馬、象、鳥などが彫られている。スリランカ北部は南インドから何度も侵略を受けた歴史があり、古い時代にはあった牛がこのムーンストーンにいないのは、侵略者がヒンズー教徒だったためと推測されている。

出展：⑥⑧ <https://en.wikipedia.org/wiki/Muragala> ⑦ <https://lonewolf17.com/polonnaruwa-quadrangle-vatadage>



⑨

蓮が生え出る壺（プルナガタ）のみが彫られたガードストーンも見つかっている。



⑩

パーマナと呼ばれる像。建物を支える姿をよく目にする。様々な解釈があるが、その1つに財宝の神クペーラの手下であるヤクシャ（夜叉）の1人で、もとは鬼神だが富を守る役目を持つとされる。一方、古代よりインドにおいて、ヤクシャは聖樹に住む精霊で、人々に畏られる存在である反面、無尽蔵の生命力を有する豊穡多産をつかさどる神でもあり、安全・安泰・繁栄の守護神と考えられている。

出展：⑨⑩ <https://thuppahis.com/2017/12/08/the-guard-stones-of-ancient-sri-lanka/>



⑧

ワタダーゲのガードストーン。聖域の守護神と推測される。コブラフドをつけたナーガラージャ（蛇神王）が片手に萌芽する枝を握り、片手に繁栄の壺を持つ。壺からは蓮の花と葉が生え出ている。足元の小人も守護神としてのヤクシャと思われる。

パールフット



①壺から出たハスの花に立つラクシュミー像。2頭の象が女神の左右から水（ガンジスの聖水）を注ぎ祝福をする灌頂の構図。「ガジャ・ラクシュミー」と呼ばれている。中央インドのパールフット出土。紀元前2世紀。インド国立博物館。

出展：① https://ja.m.wikipedia.org/wiki/ファイル:Gajalaxmi_-_Medallion_-_2nd_Century_BCE_-_Red_Sand_Stone_-_Bharhut_Stupa_Railing_Pillar_-_Madhya_Pradesh_-_Indian_Museum_-_Kolkata_2012-11-16_1837_Cropped.JPG

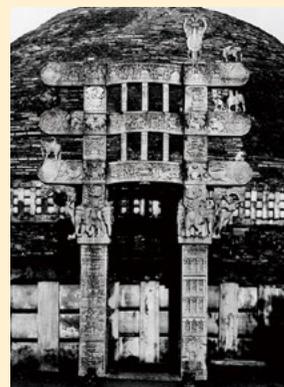
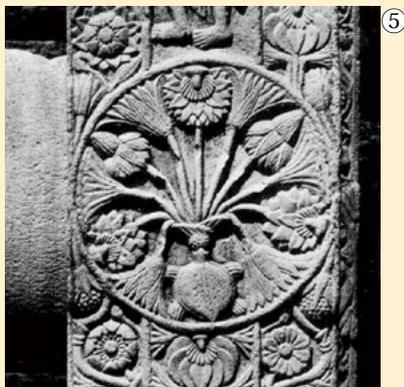
サーンチャー



釈迦の遺骨は初め8つの仏塔（ストウーパ）に分けられていたが、紀元前3世紀にアショーカ王が7つの仏塔の遺骨を取り出して8万4千の仏塔を建てて安置したという。中央インドのサーンチャーに建てられた8つのうち3つが残っている。

②仏塔の1つ。塔門や玉垣（欄干）は紀元前後に増やされた。

出展：②③④⑤ https://vmis.in/ArchiveCategories/collection_by_category/1049



③塔門には仏伝図や本生図のレリーフが。④壺からハスが生え出る図像「満瓶」。⑤熱帯スイレン（？）が亀の口から生え出ている。



古代インドの壺とハス

仙溪

インドの女神ラクシュミーはハスから生まれたとされる。図①では壺から出たハスの上に立つ姿で表されているが、仏像の蓮華台座を思い浮かべると、前回、スリランカのガードストーンやムーンストーンを紹介したが、そのあとで南インドの仏塔（ストウーパ）にその原型を見つけた（図⑥⑦）。図⑥や図⑨の石板には仏塔が浮彫されている。図⑧は生命を生み出す豊穡の壺「満瓶」だが、図⑨の仏塔とどことなく似ていないだろうか。仏塔の上部が丸い壺に見える。

釈迦は生前に仏塔の造り方を指示しているが（※）、それによると覆鉢を塔身の上に置き、平頭を乗せ、傘を立てて相輪を重ねた上に宝瓶を置くことと

している。仏塔自体を大きな壺とするなら、先端の壺（宝瓶）と、舍利（遺骨）容器も含めると、壺を何重にも積み重ねている事になる。まるで宇宙の象徴として壺をとらえていたかのようだ。

図⑩の太陽に見える大きなハスの開花模様は、あらゆる生命の原動力としての太陽をハスの花で表現したものである。図④⑤のハスやスイレンの図像で、その場を生き生きと活気づかせたかったのだと思う。

壺とハスは共に生命の不思議な力そのものであり、命が湧き出る源なのだ。日頃いけばなが空間を生き生きと活気づかせることに不思議な思いを持っていたが、古代インド人は壺や花の持つ力をすでに強く感じ取っていたのだ。

（※）根本説一切有部毘奈耶雜事・卷第十八に書かれている。

アマラーヴァティー



⑦



⑥

インド南部、クリシュナ川流域にあるアマラーヴァティーでは紀元前3世紀から紀元3世紀の建造物が発掘されている。大乘仏教を体系化したとされるナーガールジュナ(龍樹)ゆかりの地である。⑥アマラーヴァティー仏塔の装飾石板。仏塔がどのように造られたかが分かる。下中央にムーンストーン、その左右に壺がある ⑦別の石板にも満瓶(プルナ・カラサ)が確認できる。仏塔内部で宝輪のある玉座を崇拝している。

出展：⑥⑦⑧⑨⑩⑪ <https://vms.in/ArchiveCategories/gallery?search=amaravati> マドラス博物館所蔵



⑧

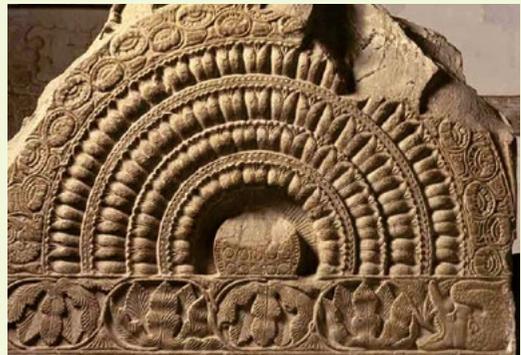


⑨

⑧仏塔の柱断片の満瓶。ハスとスイレンが生え出た上にライオンと釈迦を象徴する玉座が積み重なる。 ⑨釈迦入滅後建てられた8仏塔の1つラーマグラマ仏塔(ネパール南部)の浮彫。蛇神ナーガが守護していたため、アショーカ王はここだけ舎利の取り出しを諦めた。



⑪



⑩

⑩玉垣の彫刻。日の出のようなハスの開花模様が彫られている。その下に怪魚マカラの口から植物が生まれ出る様子も。
⑪仏塔の模型。四方に門があり、どの方向から見ても図⑥の石板のように見える造りになっている。

エジプトの青いスイレン 仙溪

仏教の經典に出てくる青蓮華しょうれんげはハスではなく青い熱帯スイレンだ(図①)。古代インドの遺跡にはハスと共にスイレンも浮彫うぼうされていた(前号参照)。この青いスイレンにはどんな背景があるのだろう。

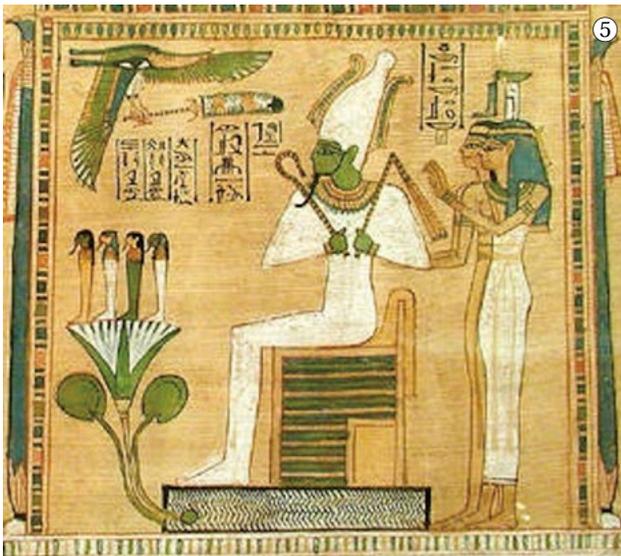


①熱帯睡蓮(エジプトロータス)

出展:「花の王国1 園芸植物」
荒俣宏著/平凡社



沼地での狩猟の様子。左にパピルス(猫も)、足元にスイレンが見える。
出展:②③④書記官ネプアメンの墓壁画、B.C.1350。①予言者ユーザーハットの墓壁画、B.C.1294-1279。(メトロポリタン美術館の複製画) <https://www.flickr.com/photos/menesje/sets/72157608008967297/with/4058204742/>



⑤冥界の神・オシリスの足元から出る白スイレン。パピルスに描かれた「死者の書」(フネフェルのパピルス)の一部。B.C.1275。(大英博物館)
出展:⑤ https://www.britishmuseum.org/collection/object/Y_EA9901-3



②饗宴の図。青いスイレンの香りを嗅ぐ女性。



③スイレンのブーケを持つ女性。



⑥ツタンカーメンの棺の花襟。メトロポリタン美術館。出展: <https://www.metmuseum.org/art/collection/search/684769>

青いスイレンと言えば古代エジプトだ。毎年ナイル川が氾濫することで生まれる肥沃な大地が、豊かな文明を育み、人々は自然界に様々な神の力を感じ取った。朝に咲き夜に閉じる青スイレンや夜に咲き朝閉じる白スイレンは、死と来世での再生を連想させた。スイレンは神々と

結びつき神聖な花となった(図⑤)。ツタンカーメンの棺に残された花襟(図⑥)には様々な植物が織り込まれていて、スイレンも加えられている。スイレンから生まれる像までも(図⑬)。それらは蘇よみがえりりの祈りの現れだろう。

熱帯スイレンには良い香りのするものが多い。彼らはスイレンを池や沼で栽培し、花から香料を抽出した。青スイレンの香りには鎮静作用があるらしい。花の香りを直接嗅いだり、葬儀の花束(図③)や神殿の捧げもの(図⑩)、女性の花飾り(図⑪)などとして利用した。人々が集まる部屋にスイレンを生けることもあったのではないだろうか。神秘的な甘い香りが広がるように。

色々調べてみて、エジプトとインドの関連性を感じている。スイレンやハスと神々との関係。再生を願う花襟(図⑥)とインドのハスの開花図像(前号11頁・図⑩)の類似性。香りの良い花を供えることや、良い香りを体に塗ることも共通している。エジプトのスイレン信仰に、生命の根源としての「壺」がインドで加わり、仏教と共に日本へ来ていけばなへと昇華した。そんな大きな流れを想像している。



テーベのレクミラの墓壁画、B.C.1479-1425。クレタ島から来たミノス人使節団。様々な金属器の贈り物を持っている。

出展：⑦ <https://www.flickr.com/photos/manna4u/albums/72157678333466360/with/32544493391/>



ファイアンス・ボウル。B.C.1550-1458。四角い池の周りにスイレンが描かれている。エジプト・ファイアンスは古代エジプトの鮮やかな青緑色の焼き物。



⑤スイレンから生まれる太陽神の子。象牙。B.C.8th。
⑥スイレンの神、ネフェルトム。銅。B.C.332-30。



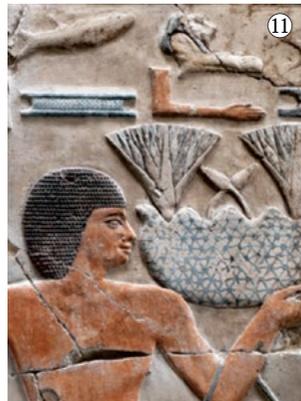
出展：⑨⑪⑫⑬⑭⑮ <https://www.metmuseum.org/art/collection/> (メトロポリタン美術館の公開データベース)
⑬ <https://www.flickr.com/photos/manna4u/albums/72157666023968570/page3>



葦の束形のアラバスター。スイレンを挿すため？
B.C.15th。高さ 6.5cm。



⑦の部分複製画。スイレンの造花が立てられた器。出展：<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/544609>



センウセト1世のピラミッドより。供物室のスイレンの鉢。B.C.1961-1917。



スイレンの頭飾り。



スイレンから出現するツタンカーメン



スイレンの造花。木製。高さ 8cm。B.C.2051-1981。

生命を生み出す豊穰の壺
プルナ・カラサ

仙溪

花と器の図像を時代を遡って探すうち、古代インドのプルナ・カラサ（満瓶）にたどり着いた。それはどうやら宇宙、生命の母胎のイメージが込められた、エネルギーに満ちあふれるもののようにである。



サーンチーの第2仏塔。石の玉垣に様々な文様が彫られている。

出展：①⑱ <https://www.greatmirror.com/index.cfm?navid=748>

仏教が起り、釈迦の教えを伝え継ぐために遺骨を納めた仏塔（ストゥーパ）が各地につくられたが、仏塔は釈迦の墓としてだけではなく、迷いの世界を抜け出した悟りの境地そのものであり、万物が生ずる源（卵）と同一視されていたようだ。ゆえにその装飾には溢れ出る生命を表したものが多く、そしてその中でも特に大切なものがハスが生まれ出る文様、プルナ・カラサであった。

インド文化省がサポートするサイトで紀元前2世紀の仏塔の装飾文様を閲覧できる。生き生きとした動物や植物が石に刻まれている。どの文様も躍動感があり、デザイン的にも素晴らしいので一部を転載させていただいた。プルナ・カラサ（④⑤②②）は他にも8つ紹介されていた。特に大切な文様なのだろう。壺から命が湧き出る。命の水が湧き出る。プルナ・カラサにはそんなイメージ

紀元前3世紀にアショーカ王が建てた仏塔が中央インドのサーンチーに現存している。紀元前2世紀以降に増築や玉垣・塔門が追加された。図②～⑱②は第2仏塔の玉垣の装飾文様の一部。

③④⑤②は壺からハスが生まれ出る文様でプルナ・カラサ（満瓶）と呼ばれる。蕾、開花、葉が彫られ、⑤には鳥も。

②は亀の口からハスが出ているが、左ページの絵②とイメージが重なる。よく見ると熱帯シレンも混じっているように見える。②の青いシレンの球根はまるで壺のようだ。

⑥はマカラ（インド神話に登場する怪魚）。⑦は象。⑧は孔雀。⑨は羽根のあるライオンか。

⑩から⑱はハスの様々な文様。デザインセンス抜群だ。⑮はハスの周りを2種の蔓が蛇のように絡み合う。⑯のハスの周りはトリシューラと呼ばれる三叉文様。三宝（仏、法、僧）を表す。

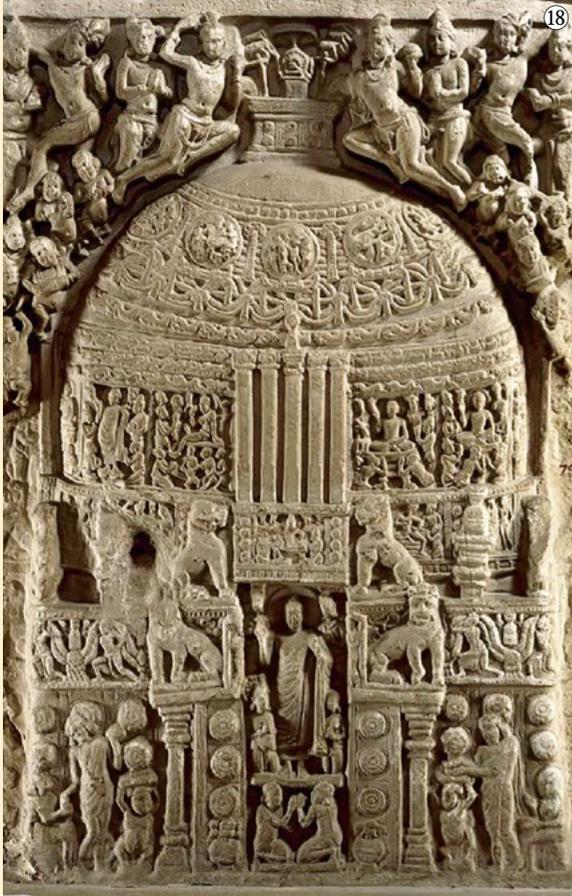
出展：②～⑱② https://vmis.in/ArchiveCategories/collection_by_category/1049

が込められている。

写真⑰は紀元前3世紀に仏教に帰依したアショーカ王が各地に建てた大きな石柱の先端部で、獅子の下にあるのはハスの花（開花して反り返る姿）とされているが、水が壺から溢れ出ている様にも見える。だとすれば、これもプルナ・カラサから湧き出る水が漲る生命を支え養うというメッセージが込められているのではないだろうか。王が感銘を受けた釈迦の教えを、湧き出る水で表現したのでは。



⑰ アショーカ王石柱頭部 (サーンチー博物館)

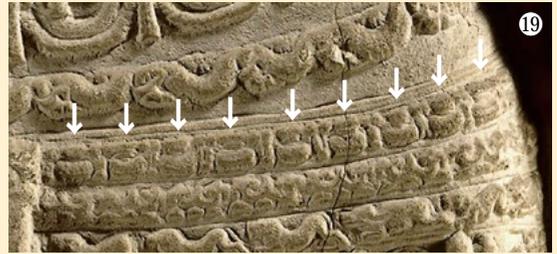


⑱

さて古代の仏塔にもどうろう。表面の装飾は剥がれているが、その装飾石板(⑱)で仏塔の様子がわかる。そこにはプルナ・カラサがぐるりと取り巻く(⑲)、中央下にも一対のプルナ・カラサが見える(⑳)。実際の仏塔入口にも石のプルナ・カラサが置かれていたのではないだろうか。そして気がついた。以前紹介した東大寺大仏開眼供養の一対の供花もプルナ・カラサなのではないだろうか(㉔)。その時導師を務めたのは来日中のインド僧・菩提僊那(ボーディセーナ)である。彼の指導で器を作りハスの造花を立てて一対のプルナ・カラサができあがる。盧舎那仏の前に置かれ、大仏殿に命を吹き込む。生命を生み出す水が満たされた豊穡の壺から花が咲き散華するイメージだ。



⑳



⑲

⑱インド南部アマラーヴァティー出土の装飾石板で実際の仏塔が想像できる。部分拡大するとあちらこちらにプルナ・カラサが(⑲⑳)。

出展：⑱⑲⑳ https://www.britishmuseum.org/collection/object/A_1880-0709-79 (大英博物館の公式サイト)



㉔



㉓



㉒



㉑

供花のルーツを探していて古代インドのプルナ・カラサに行き着いた。それは溢れ出る生命の象徴として壺でありハスであった。

⑲熱帯睡蓮(エジプトロータス) 出展：「花の王国1 園芸植物」荒俣宏著/平凡社。⑳サーンチー第2仏塔の玉垣装飾。㉑アマラーヴァティー出土の仏塔装飾石板の部分。出展：<https://vms.in/ArchiveCategories/gallery?search=amaravati> ㉒「東大寺大仏縁起絵巻」大仏開眼供養の供花。出典：<https://www.wikiwand.com/ja/東大寺盧舎那仏像>

プルナ・カラサの今と昔

仙溪

て生けることは、インド哲学的に言えば「小宇宙(個人)と大宇宙(宇宙)の関係」を体感し、それを形にしているとも言え換えられる。

花と器の図像を探るうちに古代インドのプルナ・カラサ(満瓶)にたどり着いたが、それは「豊かさ」と溢れる生命力」を象徴していた。

そのイメージは、私達が器に花をかけた時に「命の輝き」「生命の神秘」のようなものを感じることに、深いところで繋がっているように思う。

ときには五感を表す。換金作物のココナッツは繁栄と豊かさ、深い意味では神の頭または意識を象徴する。その固い殻は人に寛容さを与え、成功を達成するために一生懸命働くように促す。ココナッツはまた、寺院の神の前で砕かれ、魂がエゴの殻から抜け出すことを意味しているようだ。

プルナカラサは、ヒンドゥー教の神話の5つの原始的な要素とも関連付けられる。壺の広い下部は「地」、広がった中央部は「水」、上部または首は「火」、口は「風」を表し、ココナッツとマンゴーの葉は「虚空」を表している。

プルナ・カラサによって人は世界と繋がり、条件付きの存在から解放される。

(参考：「The Conceptual, Cultural and Artistic Significance of Purna-Kalasa and its Use in Hindu」)

and Muslim Architecture of the Subcontinent」
Naela Aamir (University of the Punjab, Lahore, Pakistan.)

古代インドの研究者、アグラワラ博士の「プルナ・カラサ」に関する書物(図③)には次のように書かれていた。

「プルナ・カラサは最も初期の時代から神秘的な生命力の目に見える象徴として、また美と縁起の良い装飾的なモチーフとして人気があり、インド文明の時代を通して存在してきた。」

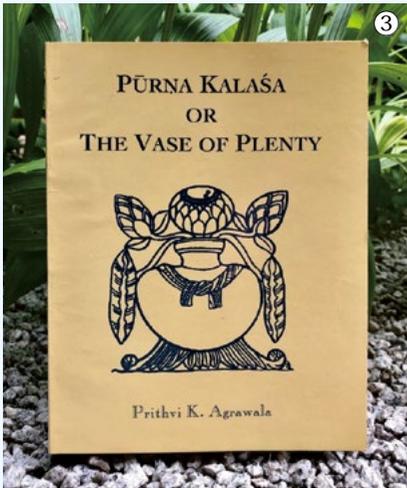
「崇拝や儀式において神またはゲストにプルナ・カラサを提供するというインドの普遍的な慣習がある。」

古い時代の叙事詩に、王妃が通る道を金や銀の壺にハスを挿して飾ったという記述もあるようだ。

そしてこの本の巻末には補足として、プルナ・カラサの起源を考える上で、



現在のプルナ・カラサ。ヒンドゥーの祭典で重要な意味を持つ。出展 図①：<https://www.wordzz.com/kalash/>。図②：<https://www.nithyananda.org/photo-gallery/nithyananda-diary-7th-august-2013-photos#gsc.tab=0>



「Purna Kalasa or The Vase of Plenty」
Prithvi K. Agrawala 著。



肩から川を出す神「エンキ」が山に足をかけている。円筒印章の印影。前2300年。大英博物館。
出展：図④⑤⑥ https://www.britishmuseum.org/collection/object/W_1891-0509-2553

※このページの図は古い時代から順番に掲載しています。

印影



⑥

円筒印章（シリンダー・シール）は円筒形の石の表面に図像を彫り、粘土板に回転させて押印する。「Adda」の印章。左から狩獵神、イシュタル、太陽神、エンキ、ウシム。高さ 3.9cm。前 2300 年。シッパル (?)。大英博物館。

円筒印章 ⑤



メソポタミアの「水が溢れ出る壺」が紹介されていた(図⑩)。「グデアのピーカー」と書かれている。グデアは紀元前22世紀頃、アッカド王国滅亡後のメソポタミア南部ラガシュの支配者で、神に祈るグデア自身の石像が多く見つかっている。その中に水が溢れ出る壺を持ったものもあるのだが(図⑪⑫)、そもそもこの水の表現は



⑦

エンキが王座に座り、肩から流れ出る川に魚が見える。高さ 3.9cm。前 2250 年。大英博物館。

出展：https://www.britishmuseum.org/collection/object/W_1911-0408-7

シヌメール神話に登場する水の神「エンキ」の図像に見られる。紀元前23世紀の円筒印章(円筒形のハンコ)に、肩から川が湧き出るエンキの姿が彫られている(図④⑤⑥⑦)。「エンキ」には「地の王」という意味があるそうで、あらゆる生命の源と解釈すると、インドにおけるプルナ・カラサとの繋がりも感じられる。太古からの清冽な水の流れ。人は水に豊かな生命力の源を感じとり、壺と花の造形を生んだ。過去に自然と人の関係から様々な美が創造されてきた。いけばなもその一つなのだと思う。



⑨

「アッカド王シャル・カリ・シャリ」の印影。2人の英雄が水が湧き出る壺を持つ。スイギウウのいるインダスト、メソポタミアが交流していたことが読みとれる。高さ 3.9cm。前 2217～2193年。ルーヴル美術館。出展：<https://collections.louvre.fr/ark:/53355/cl010147030>



⑧

ひざまづく4人の英雄。うち1人の頭に水が湧き出る壺が見られる。前 2220～2159年。アッカド、メソポタミア。高さ 2.8cm。メトロポリタン美術館。出展：<https://smarthistory.org/cylinder-seals/>



⑪



⑫

⑪ ラガシュの王子グデア。農業の女神ゲシュティンアンナに捧げるための、水が湧き出る壺を持つ。前 2120年頃。ルーヴル美術館。⑫ 水の流れに魚が見える。出展：[図⑪⑫ https://collections.louvre.fr/en/recherche?q=Gudea](https://collections.louvre.fr/en/recherche?q=Gudea)



⑩

無限の水が流れ出る壺を示す石灰岩の記念碑の一部。グデアの時代。大英博物館。出展：<https://www.britishmuseum.org/collection/search?agent=Gudea> この図像はグデア以前、アッカド王国時代から見られる(図⑧⑨)

日本にきた満瓶 プルナ・カラサ

仙溪

これまで壺から蓮が生え出る図像「プルナ・カラサ（満瓶）」が古代のインドで生まれたことを見て来た。壺に満たされた水は生命の源であり、生え出るハスは力強い生命の象徴であった。

インド、中国、朝鮮、日本と仏教が伝わる中で、満瓶はどうなったのだろう。

仏教が伝わって150年頃の日本に、ハスが生え出る壺の図が存在していた。奈良国立博物館所蔵の国宝「刺繍釈迦如来説法図」（図③）に満瓶に似た図像をみつけた。（図①）。



国宝「刺繍釈迦如来説法図」の部分。
赤い紐飾りのある丸いガラス(?)の壺から、ハスの花と葉が出ている。いけばな的に見ると、水際立ったシンプルな生花(せいかな)のようにも見える。



国宝「刺繍釈迦如来説法図」の部分。
後ろ向きの女性(大西説では武則天)がハスの生え出るガラス(?)の壺を釈迦如来(大西説では弥勒仏)に捧げ持っている。その上に植物が生い茂る池のようなものがあるが天界の泉か。手に持つ壺と関連があるのだろうか。

似ている。今まさにハスが生まれ出たという感じがする。刺繍で表現されているのだが、7〜8世紀頃の中国仏教に関わりを持ち、日本に伝わったものようだ。

とても高度な刺繍による仏画(繡仏または繡帳と呼ばれる)で、いつ何処で誰が作らせたのかの記録はない。

樹の下で腰掛ける赤い衣の如来が大きく描かれ、左右に菩薩たち、その上に奏楽天人たち、下方には俗人や比丘(仏教僧)が居並ぶ中で、中央に後ろ向きの女性が立っている。この図の解釈や製作地(日本か中国か)には様々な説があるようで、どの説が正しいのかわからないが、中国史上唯一の女帝である武則天(則天武后)が宮廷工房で作らせたとする大西磨希子氏(仏教大

学教授)の説が興味深い。

武則天は690年に皇帝の座につく時、女帝出現を予言した經典があることを理由に自分の正当性を誇示したとされている。その時10人の沙門(仏教僧)の協力を得た記録があり、この図像と一致する。自分が理想的統治者であるというイメージを打ち出すために作らせた繡仏だとするのが大西氏の説だ。702年に日本から遣唐使が長安を訪れ、武則天に拝謁した折に賜ったものと推定しておられる。他の説と比べてみて、一番説得力があるように思う。

後ろ向きの女性のとなりに、花が盛られた水盤(供花)を捧げ持つ僧がいる。武則天(後ろ向きの女性)は中央の弥勒仏(大西説による)に向かい、ハスの生え出る壺を右手に持っている。壺

は青いガラス製だろうか。こちらは供花というよりも、清らかな水を弥勒仏に捧げている(もしくはは授かった)ような感じだ。命を生み育む、生命の源としての水が、このドラマチックな場面に命を吹き込んでいるかのようだ。

よく似た図像が2〜3世紀のインド仏教遺跡から見つかっている(図⑥)。神々がハスの生えた丸い壺を持ち、そこから天界の神聖な水を仏陀の居場所にそそぎ、祝福している。ここではハスの生えた壺は天界の清浄な水を表しているのだろう。

絵の解釈はともあれ、飛鳥時代末期の日本に、プルナ・カラサ(満瓶)に似た図像が存在したのだ。ハスの生え出る壺の図像は、当時の日本人に何かをもたらしたはずである。



3

国宝「刺繍釈迦如来説法図」。京都・勸修寺（かじゅうじ）に伝えられ、「勸修寺繡帳（繡仏）」の名でも呼ばれる。縦207・横157cm。8世紀。奈良国立博物館。出展①②③④⑤⑥：<https://www.nara-museum.jp/collector/647-0.html>

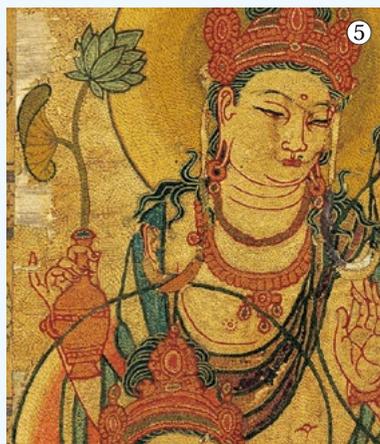
中央の釈迦如来（大西説では弥勒仏）を囲うように上から六仙人、十二奏樂天人、十四菩薩、十比丘、十二供養者が描かれている。大西説では弥勒菩薩が弥勒如来となつて兜率天から現れるという下生信仰にかけて、現世を救う弥勒仏に自分をかきかねた武則天の強い意図があつたとされている。天界の浄水が満ちている。座の背には壺の装飾が見える(図④)。



4

〈情報〉

奈良国立博物館・特別展「奈良博三昧 至高の仏教美術コレクション」前期展 8月15日に 国宝「刺繍釈迦如来説法図」が出品されています。すべての作品が写真撮影可能だそうです。

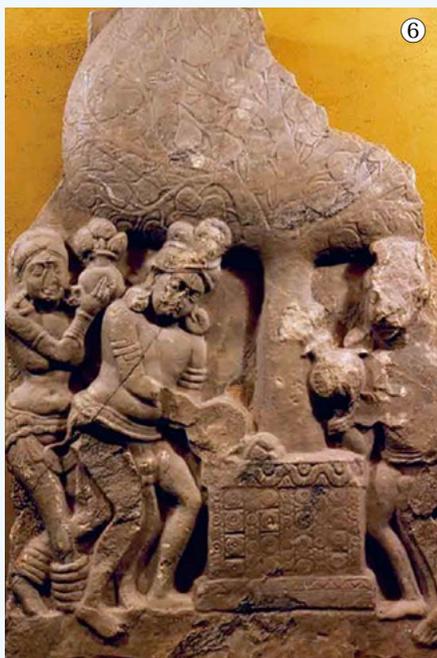


5

国宝「刺繍釈迦如来説法図」の部分。菩薩の一人がハスが挿された水瓶（浄瓶）を持つ。花による供養を表すものか。唐時代の中国で、実際にこのような瓶花がいけられることもあったのだろうか。

【参考】

「奈良国立博物館所蔵 刺繍釈迦如来説法図の主題」
「則天武后期の仏教美術」大西摩布子
『仏教史学研究57巻』(仏教史学会) 2015年3月



6

インド、アマラーヴァティー出土の石版。2〜3世紀。「菩提樹の崇拜」神々がハスの花が咲く壺を持ち、聖なる木に天界の神聖な水を注いでいる。菩提樹は仏陀を祝福するとともに、清浄な場所であること表現しているのだろう。クリーブランド美術館。出展⑦：<https://www.metmuseum.org/Archives/ArchivesCategories/gallery/search=amravati>

羅漢図の插花

仙溪

羅漢とは「修行を完成し、供養に値する者」を意味する「アルハット」を漢字音で表した「阿羅漢」の略称で、釈迦

の入滅後に長寿を保ち法の護持と人々の救済を釈迦から託された16羅漢や、超人的な能力を持つ聖人達のことをさす。平安時代中期から鎌倉時代に中国から十六羅漢図などと共に羅漢信仰がもたらされた。

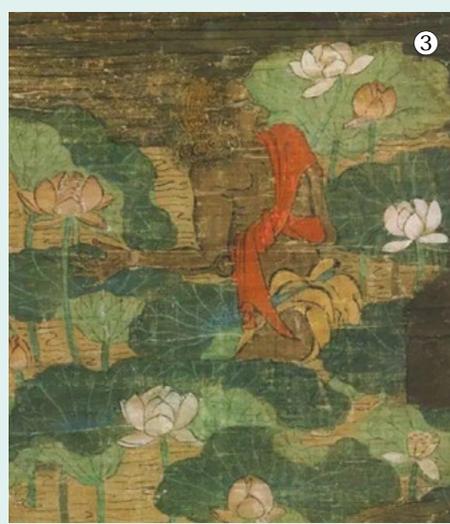
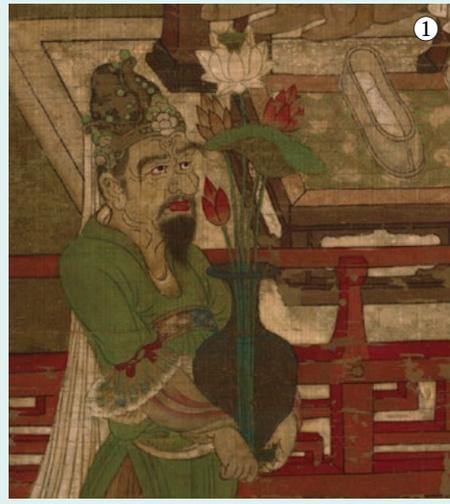
平安末期に日本で描かれた十六羅漢図（11世紀）には、ハスの花葉を挿したガラス花瓶を抱え持つ従者が見える（①②）。伝来の絵を元にしたのうな供花が行われていたもの

と想像できる。前に紹介した遼の墓所（1116年）に瑠璃瓶に挿された供花の絵が描かれていたことも繋がりを感ずるし、日本においては鳥獣人物戯画（平安末〜鎌倉初）にハスの供花があり興味深い。

戦乱によっても衰退しかけた仏教は、宋代に庇護をうけ再興する。明州には禅僧の栄西や道元も訪れ、大陸の文化を吸収して日本へ持ち帰っている。仏教復興の時代に日本や高麗と交流が続く明州で、この羅漢図百幅は年以上の歳月をかけて描かれた。

別の羅漢図には蓮池でハスの花葉を採取し、青磁の花瓶に挿して仏に供える場面がある。中国・南宋時代に明州（現在の寧波）で描かれた五百羅漢図・百幅の一つだ（③④）。

蓮池の描写は南宋の都・杭州（当時は臨安）の西湖を彷彿とさせる。杭州は明州のすぐ隣だ。明州にも東銭湖などハスは身近にあったと思われる。気候おだやかなこの地域



拠点として栄えた港湾都市で、702年以降の遣唐使船もまですこに上陸して唐の都、長安（現在の西安）を目指した。唐代後期の廃仏法難以後、

（江南地方）では、実際にハスを花瓶に挿して供えていたのだろう。彼の地で修行中の栄西や道元もハスを切って花瓶に挿しただろうか。



十六羅漢図（国宝）の一つ。11世紀。聖衆来迎寺伝来。東京国立博物館蔵。
出典①②：https://emuseum.nich.go.jp/detail?content_base_id=100157&content_part_id=016&langId=ja&webView=e 国宝サイトより転載



五百羅漢図 100 幅の一つ「採蓮」。12世紀後半、明州の恵安院（東銭湖畔の寺院）に施入。現在は京都大徳寺他に伝来。
出典③④：https://kknews.cc/news/09ok5b6.html

日本にきた満瓶 プルナ・カラサ②

仙溪

奈良国立博物館所蔵の「胎藏図像」(1194)を見る機会があった。その巻頭にひとときわ大きく描かれたハスの生え出る宝瓶の絵は、インドのプルナ・カラサ(満瓶)を連想させる。

「胎藏図像」の原本はインド僧・善無畏によって玄宗皇帝の頃に唐で書かれている。唐の都・長安の華やきを彷彿とさせるような華麗さを感じるが、おそらくこの壺の絵に密教の真理を描ききつてあるのではないだろうか。

私の解釈では、壺をのせる逆さの蓮弁は大地、それを支える渦巻く水、丸い装飾は火、はたたく紐には風、球形

の壺は水であり虚空(宇宙)であり、そこからハスが生まれ出ている。球体はガラスのようで、底にはハスの開花が映り、ハスの花から壺が生じていることを思わせる。上半分には撚り紐が巻き付くが、龍の鱗のようだなと思つて見ていると、中央上部の小さな丸が龍の目に見えてきた。

8世紀初頭、どんな思いをこの絵に込めたのだろう。仏教に詳しくない私には真の意味は分からないが、じつと見ていると、私たちが生きる生命世界の静寂と躍動、内なる神秘と漲る力が感じられる。

奈良博ではもう一つプルナ・カラサを思わせる壺を見つけた。高さ約60セ



「胎藏図像」(1194)には密教の世界観が絵で表されている。円珍(814-891)が唐より持ち帰ったものの転写本で、その元絵はインド僧・善無畏(シュバカラシンハ 637-735)が『大日経』を漢訳する際に描いたとされる。善無畏は中部インド摩伽陀国の国王で、出家後ナーランダー僧院で学んだ密教を唐へ伝えた。

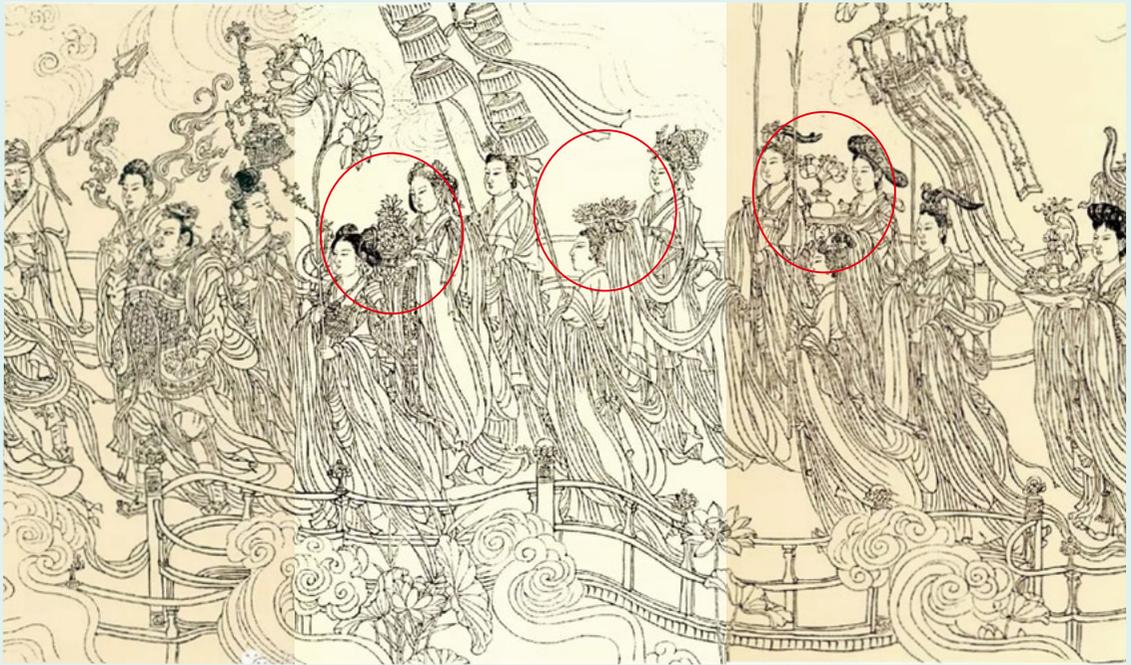
出典①~④:奈良国立博物館「奈良博三昧至高の仏教美術コレクション展」

ンチの「愛染明王坐像」(③④)は宝瓶から生まれ出た蓮華の上に座る姿。

現在日本で視覚できるプルナカラサの一つだと思う。



「愛染明王坐像」奈良・興福寺伝来。木造彩色截金。高さ約60センチ。鎌倉時代。明王が坐す蓮華を生み出すこの壺(宝瓶)も、生命の母胎としてのプルナ・カラサ(満瓶)のイメージと重なって見える。



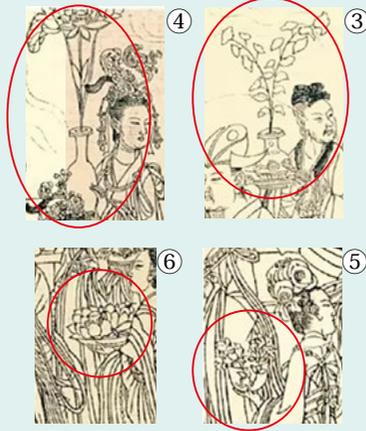
「八十七神仙巻」の元絵は呉道玄（初名：道子）作と伝わる。道教の神仙たちが3人の皇帝と共に天上界を歩む。徐悲鴻記念館蔵
 出典①：澎湃新聞 https://www.thepaper.cn/newsDetail_forward_2051721 ②～⑥：澄境芸術 <http://www.cjxysw.com/pd.jsp?id=40>

唐王朝の挿花

仙溪

呉道玄（生没年不詳）は8世紀、唐の玄宗皇帝に仕えた画家で、その天才的な筆致には神が宿ると評された。宮殿、寺院、道観などの壁画は現存しないが、彼の作と伝わる絵から唐王朝における花の文化を想像してみたい。

「八十七神仙巻」（図①～⑥）は3人の皇帝が天上の橋を仙人や神々と共に進む場面が描かれている。従者は様々な



な楽器や供物を手に持っているが、蓮や菊、その他の花の供花（だと思ふ）も多く描かれている。⑥盤に花を盛ったもの、⑤ガラス鉢に花を養ったものに加えて、③④花を挿した器を持つ姿も多く見られる。

「送子天王図」（図⑦）は仏教の絵で、釈迦牟尼仏降誕の故事が描かれている。その中に壺を持つ女性が描かれているが、壺には蓮の葉ほか（蓮花？）が挿されている。

これらの挿花が何のためのものか断定はできないが、唐の玄宗皇帝の時代（712～756年）、すでに挿花は行われていたと想像できる。少し遡ると武则天（690～705年）がある。女帝のもとで花の文化が開いた。

日本人が憧れ持ち帰った唐の文化。その中に供花であれ何であれ、花を挿す文化もあったのかもしれない。

「送子天王図」の元絵も呉道玄作と伝わる。大阪市立美術館蔵 出典⑦：鳳凰新聞 <https://guoxue.ifeng.com/c/88KWa1cVrZk>

中国の插花

仙溪

中国にはどんな插花の歴史があるのか。今に伝わる図像を見てみよう。

明の時代（1368～1644）はモンゴルの支配から脱し、漢民族によって中国が再び統一されて始まる。官僚・文人中心の文化が、広く一般民衆にまで広がっていった時代でもあった。

第十六代皇帝・熹宗（在位 1620～1627）はユニークで素晴らしい肖像画を描かせている。

絢爛たるデザイン（絨毯が敷かれ、玉座の両脇には豪華な朱塗りの卓）の様々な贅を尽くした日常の道具が描か

れている。あちらこちらに皇帝の権力の象徴である龍が見え、これだけ多くの物を描いているにもかかわらず、全体は調和し、品格を感じさせる。

そして画面上段で一对の插花が皇帝と並ぶ。花と器にはその人物の高い徳を象徴する役割があるのだろう。

拡大して見てみると、右側は装飾を凝らした紺色の花瓶（陶？ガラス？）に牡丹のように見えるバラの花が。左側には白梅と竹（の葉）に牡丹に見える椿（？）が挿してある。絵の中の皇帝に命を吹き込んでいるかのようだ。なぜこれらの花が選ばれたのか、きつと深い意味があるに違いない。



「明の熹宗皇帝坐像」明代 台湾国立国史馆博物院
明代皇帝の肖像画の中でひととき異彩を放つ装飾性は精緻かつ豪華。

出典：<https://theme.npm.edu.tw/opendata/DigitImageSets.aspx?sNo=04020370&Key=花^21^11&pageNo=26>



遠目では牡丹に見えるが、葉の形をよく見ると向かって右は薔薇で、左は萼の感じからして椿のようだ。バラは一種でいけられ、ツバキ（？）には白梅と竹の葉との三種でいけられている。いけ方は自然体だが洗練されている。皇帝が自らいけたものか、花をいけて飾る専門職があったのだろうか。

中国の挿花 ②

仙溪

台湾・故宮博物院がデジタルで公開している所蔵品に中国挿花の痕跡を辿ってみた。前号は明代後期の宮廷肖像画だったが、今回は明代初期、宣徳帝（第5代皇帝）の時代の「歳朝図」を紹介したい。歳朝とは新年元日のことで、春節の風俗を描いた絵を「歳朝図」と呼んでいる。

左の軸は宣徳2年（1427年）、邊景昭（字は文進、明代初期の宮廷花鳥画家）による「歳朝図」で、古代の銅器（銅尊）に10種類の花などが挿されている。

梅（清高）

松（寿）

柏（誠実）

椿（富貴）

蘭（幽玄）

水仙（品潔）

南天（消災解厄）

柿（万事順調）

如意（自在）

靈芝（健康）

の10種それぞれに、徳や吉祥、厄除け、健康などを願う寓意があり、新年を迎えた宮中で実際に挿されたものを絵で記録し、その後、春節には毎年この絵を飾ったのだろう。絵の上部に見える



2首の詩は、300年後の清朝6代皇帝乾隆が書き加えたものである。植物に個別の寓意をもたせ、その組み合わせを大切にするのは、中国挿花の重要な要素であるようだ。

いけば方は四方正面だろうか。如意や靈芝など多種類が調和し躍動感もある。高い教養と確かな技術を感じる。さて、この挿花図が描かれた頃、日本は室町時代中期で、いけばなの歴史としては「立て花」が立てられはじめた頃にあたる。中国の挿花がどんな歴史をたどり、それぞれの時代の交流で日本の挿花がどのように影響を受けたのか、興味は尽きない。



「歳朝図」明代 邊景昭 台湾国立故宮博物院
 歳朝とは正月の一日目をさし、歳朝を主題とした吉祥画が多く描かれた。この絵にも新春にふさわしい植物が描かれ、新年を迎えた喜びが満ちあふれている。邊景昭は明代初期、14c 末～15c 前半の宮廷画家。
 出典：https://digitalarchive.npm.gov.tw/Painting/Content?pid=5790&Dept=P

中国の挿花 ③

仙溪

前号で紹介した絵は明の第5代皇帝、宣徳帝（宣宗）の時に描かれている。宣徳帝は自分でも絵を描くのが好きだったようで、花や鳥、猿、羊、猫などの絵が伝わる。どの絵にも自然の風趣を愛でる繊細な心を感じる。

「壺中富貴図」では吊り下げられた銅壺に牡丹がいけられ、猫が見上げている。中ほどには磁器の三足洗が見える。宮中の点景を描き留めたものだろうか。花と猫、静と動の対比が面白い。宣徳帝は猫が好きだったようで、「花下狸奴図」では太湖石の前に菊と2匹の猫が描かれている。狸奴は猫の異称。

この絵の上部には「神肖烏圓」と書かれてあり、神のような猫、という意味らしい。偶然にも家の猫達と似ている。

「壺中富貴図」の吊り花は牡丹だけでいけられ、前号の春節を祝う10種でいけた重厚な挿花とは対照的で、身近な日常の花という感じである。洗は元々手や顔を洗うためのものなので、皇帝が寝室で牡丹を眺め、香りを楽しむための挿花なのかもしれない。もしそうだとすると、あえて白い牡丹だけをいけているのも頷ける。

宣徳帝の描いた挿花図をもう一点紹介

介しておこう。「嘉禾図」は瑠璃瓶に粟が一本挿されているだけの絵だが、穀物の実りの美しさを絵に描いておきたいという気持ちを強く感じる。四方に垂れる穂と葉の姿。畑

にあれば群生の中の一本来にすぎないものを、特別な器に挿すことで感じる神々しさが描かれている。

明代の宮廷における挿花には花材ごとに意味があり、その時その場に相応しい花材を選んでいけることが基本理念としてあるようだが、宣徳帝の

絵を見てみると、純粹に花を器に挿すことで生まれる特別な雰囲気味わう心、自然と人を同一のものと見る心も大切にしていたのだと感じる。



㊤ 「壺中富貴図」明代 宣宗（宣徳帝）1429年
 ㊦ 「花下狸奴図」明代 宣宗（宣徳帝）1426年
 ㊤㊦㊧：台湾国立故宮博物院所蔵。どれも宣徳帝が描いたもの。
 出典：台湾国立故宮博物院アーカイブサイト ㊤ <https://digitalarchive.npm.gov.tw/Painting/Content?pid=5804&Dept=P> ㊦ <https://digitalarchive.npm.gov.tw/Painting/Content?pid=3220&Dept=P>



㊧ 「嘉禾図」明代 宣宗（宣徳帝）1427年



出典：<https://digitalarchive.npm.gov.tw/Painting/Content?pid=5805&Dept=P>

中国の挿花

④

仙溪

前回、明の宣徳帝が自らいけたかもしれない挿花の絵を紹介したが、宮中においては暮らしの中で花をいけていたこと、それを皇帝自ら絵に描いていたことを知った。15世紀初頭の中国には、すでに挿花が主題となった絵画が存在していた。

翻って日本ではどうだろう。器に花を挿して観賞することはすでに平安時代の貴族社会で行われていた。清少納言が『枕草子』の中で「いとおかし」と、書き留めてくれている。しかし中

国の挿花図のように挿花のみを生き生きと描いた絵がはたして存在したのだろうか。

日本と中国を絵画の視点で比較してみるかぎり、中国では花を挿すという行為がかなり古くからとても大切にされていたのだと感じる。美しい絵画で後世に残そうとまでした「挿花」に、どんな思いが込められ、どのような時代背景があったのだろうか。

明の一つ前、元の時代（1271〜1368）にも美しい挿花図を見つけたので紹介したい。この絵も台湾・故宮

博物院がデジタルで公開している所蔵品の一つだ。

「太平春色」と名付けられた軸には首の長い白磁の花器に6本（5種？）の牡丹がいけられている。純白の器は表面に模様が彫り込まれていて清雅な品格を感じる。どの花にも命の輝きが感じられ、後ろ向きの黒い牡丹が絵に深みを与えている。おのおの個性が光る女性たちの群舞を見ているようだ。

この絵は元の末期、1361年に張中という人が描いたもので、約450

年後、上方に文字が書き加えられた。張中を調べてみたところ、字は子政、生没年不詳、江蘇松江（現在の上海）の人で、山水画を黄公望に師事したとくらしいから分らない。

師の黄公望（1269〜1354）は水墨画の傑作「富春山居図」を描いた文人画家なので、張中も文人と推測される。

高い教養と志をもち、風雅を愛する文人にとって、花を器に挿すこと、それを絵に描くことは、すなわち自己世界の表現だったのである。明の宣徳帝の絵にも同じものを感じる。



「太平春色」元代 張中 1361年
台湾国立故宫博物院所蔵。

出典：台湾国立故宫博物院アーカイブサイト
<https://digitalarchive.npm.gov.tw/Painting/Content?pid=729&Dept=P>

この挿花図は風景の一部としてではなく、挿花だけを描いている。前回紹介した「歳朝図」も同じ描き方だったが、おそらくこの絵を壁に掛けることで、あたかもそこに花がいけられているように感じるだろう。実際にいけた花と器から生まれる感覚を、そのまま絵に描きたい。後の人にもその雰囲気を与えたい。そんな思いを感じる描き方だ。花の上方に「座右得清陪」と書き加えた人は、この絵を自由で清らかな精神の拠り所にしていただろう。

中国の挿花

⑤

仙溪

今に伝わる挿花図が、中国挿花の歴史を知る手がかりになるのでは？。そんな思いで台湾・故宫博物院デジタルアーカイブを彷徨っている。今回は宋末から元初にかけての文人画家、銭選の絵を2点紹介する。

銭選（1239～1301 諸説あり）は現在の浙江省湖州市の人で、南宋時代に官吏の登用試験に合格したが生涯に渡って仕官はせず、故郷で他の文人達と交流しながら画技を極めた。その画風は北宋時代の宮廷画家による院体画

に習い、写実的で緻密。銭選の絵は黄公望など元末の文人達に影響を与えて文人画隆盛につながった。

「四季平安」(①)と名付けられた彼の絵には春夏秋冬の様々な花が描かれている。牡丹、椿、白木蓮、蓮、夾竹桃、秋葵、水仙など、現実にはあり得ない組み合わせの花々が一緒に銅器にいけられ、口元に葎らしきものまで見える。

この絵を見てみると、自然の理を超越した不老不死への憧れのようなものを感じる。どの花も不老不死の仙薬になりそうな雰囲気だ。人もしかるべき修行を積めば仙薬によって仙人になれる

ると信じられていた神仙思想が根底にあるのだろう。官に仕えず自由な生き方を選んだ銭選のこの絵は、現実世界の自然や社会的制約を超越した心が生んだ空想の挿花図なのだと思う。

中国文化を理解するには、神仙に憧れる心を知っておかねばならないのだろう。花を挿す文化もそのあたりに深く関わっていきそう。

銭選の別の絵(②)には、ジャズミン？の散華と可憐な野草の挿花が描かれている。こちらは実際に書齋に飾って、自然の気を取り込んでいたのだろう。素朴な優しさにじみ出ている。



「四季平安」宋代 銭選 13世紀後半？

台湾国立故宫博物院所蔵。

①②出典：台湾国立故宫博物院アーカイブサイト <https://digitalarchive.npm.gov.tw>

①春の牡丹、夏の蓮、秋の秋葵（おくら）、冬の水仙などが銅器に挿されている。他にもキノコや変異種らしき花もあり、枝の姿も屈曲し下垂する。妖艶な気配をまとった挿花図である。

②日常の点景を描いたものだろうか。角盆に散り敷かれた白い花の甘い香りが漂ってきそう。小さな銅器に春の花が挿されている。花を摘んで挿した人の優しさが滲み出ている。



「花籃圖」宋代 銭選 13世紀後半？

文人にとつての挿花は、神仙世界に繋がる扉のようなものだったのかも。

①

中国の挿花 ⑥

仙溪

「天中佳景」と題された絵には、端午節（天中節）に、ゆかりの植物を花瓶にさしたり器に盛って飾る風習が描かれている。いま摘んできたばかりのよななヨモギとシヨウブの葉が置かれ、挿花からは小さなトラやチマキの飾りが吊されている。絵の上部には護符が5枚描かれ（貼られ）ている。

花瓶に挿されている赤い花はザクロ。ピンクと白の花はタチアオイか。ガマが1本。盛り物は2種類の粽と団子にザクロ、ライチ（レイシ）、クワ、ヤマモモ等の実。他にもシロクワイ、サクランボも飾られている。絵の中の植物も飾りも護符も、どれもが悪い物を遠ざけるためのものだ。日本でも5月5日の端午の節句にヨモギとシヨウブを軒に吊したり風呂に入れたりするが、それらには香りで邪気を払い、薬効で身体を強くする願いがこめられている。

中国では端午節に蛇・蜥蜴（又は蜘蛛）・蠍・蜈蚣・蝦蟇の「五毒」とされる害虫が湧き出るので、霊草（葉草）の力でそれらの侵入を防ぐ風習があった。霊草は刻んで袋に入れたり（統命縷）、人型にして門口に掛けられた。「端午の虎」が五毒を踏みつけると信じられていたことによる。可愛い飾りにはこどもの健康を願う思いも込められていたに違いない。

護符の4枚は道教の呪符（霊符）で魔除けの意味があるのだろう。中央の鍾馗像は日本でもよく見かけるが、はじめは玄宗皇帝が鍾馗と名乗る者が小鬼を退治する夢を見て熱病が治ったことによる。以来、絵に描いた鍾馗像は年末の魔除けとなった。いつしか福をもたらす蝙蝠と共に描かれて端午節の護符になったらしい。



「天中佳景」元代 作者不詳
台湾国立故宫博物院所蔵。

出典：台湾国立故宫博物院アーカイブサイト <https://digitalarchive.npm.gov.tw>

魔除けの鍾馗像が年末から端午に変わるの明代中頃だそう。元代に描かれ、明代に護符が貼られたか？。邪を払うとされる石榴、菖蒲、蓬、蒜、龍船花（サンタンカの中国名）は「五瑞花草」と呼ばれた。



繊細に作られた魔除けの飾り。トラ、チマキ、シヨクメイユなどが吊り下がる。



鍾馗とコウモリは魔除けと招福のための図像。

中国の挿花 ⑦

仙逸

古の絵画に中国挿花を探している
と、花を挿した器を手に持つ人物もよ
く目にする。

陳洪綬 (1598 ~ 1652 明代末期の文
人画家) の『仙人献寿図』にも挿花を
大切に抱え持つ人物が描かれている。
中国では長寿の祝いに『麻姑献寿図』
を掛ける風習があるそうで、この絵も
その一つと思われる。

麻姑とは『神仙伝』に記される仙人
で、錦の美しい衣を身につけ、目は輝
きを放ち、爪は鳥の爪のように長いと
ある。天界を統べる女神西王母の誕生
日 (3月3日) に、麻姑が美酒を贈っ
たという伝説から、『麻姑献寿図』は
長寿の象徴となった。



『仙人献寿図』明 陳洪綬 台湾国立故宮博物院所蔵



『水樹看鳧』南唐 周文矩 台湾国立故宮博物院所蔵
出典：台湾国立故宮博物院アーカイブサイト



『仙人献寿図』の右の仙女が麻姑だ
ろう。美酒が湧き出る瓢箪を杖にぶら
下けている。靈芝の盃(?) を持つ手
は鳥のようである。そして左の仙女が
持つ銅器(?) には赤い実が挿されて
いる。これも西王母への献上品ではな
いだろうか。ただし西王母から賜った
仙果 (蟠桃) とも解釈できる。いづれ
にしても長寿を祝うに相応しい。

ちなみに背中を掻く「孫の手」の元
は「麻姑の手」とする説がある。興味
のある人は検索を。

さて、ぐっと時代を遡って10世紀後
期の宮廷画家、周文矩 (生没年不詳)
の『水樹看鳧』を見てみよう。水樹と
は水亭 (水辺のあずまや) のこと。鳧
はカモをさす。水鳥を見ている女主人

の横で侍女が挿花を持ち従っている。
赤い花瓶に挿されているのは桃の白花
だろうか。柳の葉が茂る頃なので白梅
ではなさそうだ。湖岸にも同じ木が生
えている。挿花は足付き台に載ってい
るが、水の神様へ花を献じて息災を
祈っているのかもしれない。

以前に紹介した絵にも挿花を捧げ持
つ人物が描かれている。どの絵からも
その対象は違えども花を恭しく献ずる
心を感じる。

花を献ずる姿に、目に見えない大い
なる力に対する畏怖と敬いを感じる。
健康と安寧を願いながら器に花を挿す
様子が目に浮かぶ。植物に対して身体
も心も健やかにしてくれる霊的な力を
感じとっていたのではないだろうか。

右から順に、『八十七神仙卷』吳道玄 8世紀。『送子天王図』吳道玄 8世紀。『水樹看鳧』周文矩 10世紀後半。『五百羅漢図・採蓮』周季常、林庭珪 12世紀後半。『仙人献寿図』陳洪綬 17世紀前半。 出典 八十七神仙卷：澄境芸術 <http://www.cjysw.com/> pd.jsp?id=40 送子天王図：鳳凰新聞 <https://guoxue.ifeng.com/c/88KWa1cVrZk> 五百羅漢図：毎日頭條 <https://kknews.cc/news/o9ok5b6.html>

中国の挿花 ⑧

仙溪

夏むぎの挿花図を探して見つけたハスの絵に、多くの詩が書き加えられている。清の第4代皇帝、康熙帝（1654～1722）の時代に描かれたあと、のちの皇帝や皇族、書家、画家、政治家、計13人が詩を寄せている。上部にある「珠池寫妙」の文字とその下の詩は第6代皇帝、乾隆帝（1711～1799）によるものだ。絵の題名「敖漢千葉蓮」の敖漢は北

京の北東あたりを治めていたモンゴルの部族名だ。千葉は千弁という意味だろう。絵のハスはどれも花弁の多い重弁咲きで、一つの茎に二つの花が咲くものも見える。康熙帝の時代、北京北東部に避暑山荘が建てられ、その御苑池に移植した敖漢千葉蓮をことのほか愛されたそう

清は満州、漢、モンゴル、ウイグル、チベットの五部族を少数派である満州人が統治した。各民族の自治を認め、

争いよりも和を優先した。皇帝が夏を過ごす離宮は、それぞれの長が訪れることで融和を確認する場所でもあった。ハスは中国語で「荷」とも書き、その発音は「フー」。そして「和」の発音も「フー」だ。様々な土地から贈られたハスが咲き、賓客をもてなす。ハスは他民族の和の象徴だったのだろ

『敖漢千葉蓮』 清 蔣廷錫 台湾国立故宫博物院所蔵
出典：台湾国立故宫博物院アーカイブサイト

この絵は康熙帝が亡くなる年（1722）の夏に描かれている。康熙帝は中国史上最も偉大な君主の一人。政治的才能と慈悲深い配慮の理念をあわせもち、科学や芸術にも強い関心を持っていた。朝4時に起きて書や絵画の練習をしてから朝廷へ向かったという。



挿花図ではないが、ハスの印象的な絵を見つけた。題名の「琴歌南風」について調べると、「南風之詩」という故事に行き着いた。昔々、舜という帝王（紀元前2千年頃）が五弦の琴を弾いて南風の詩をうたうと世の中が平和になったというお話だ。詩では「南風の香りが民の怒りを和らげる、南風の時に民の財を豊かにせよ」と、民を思う舜帝の姿が詠まれている。

絵ではハスの甘い香りが風に運ばれてくる中で舜帝が琴を弾いている。「南風之詩」の風景にハスが選ばれたのは南国のイメージと共に、ハスに象徴された「和」への思いを感じる。ハスの花の姿や香りが人の心を豊かにしてくれる。

この絵は人物事蹟12幀の一つで乾隆帝の時代に描かれた。乾隆帝は古今の書物を編纂しなおす大文化事業を成し遂げている。歴史に目を向け、文化を政治に生かそうとしたのだろう。

もう一つ、夏に涼を感じる絵をご紹介したい。明の「山亭納涼図」には山の庵で寛ぐ文人と童僕が描かれている。庭に育つタチアオイを切らんとする童僕の足元には、すでにザク口の花（？）が挿された壺が見える。庭の花を器に挿す風流こそ、文人の理想の世界だったのだろう。



④『人物事蹟十二幀・琴歌南風』清 金廷標 (?~1767)

⑤『山亭納涼圖』明 周臣 (1450~1535)

④⑤とも台湾国立故宫博物院所蔵。出典：台湾国立故宫博物院アーカイブサイト
 どちらの絵にも、植物の間をぬけて、心地よい風が吹いている。

中国の挿花^{そうか}

⑨

仙溪

屋外に設けられた祭壇の前で猫達が遊んでいる。黒漆の机には一對の挿花と一對の丸い漆箱が左右対称に置かれ、中央に紫色の尊型瓷器が緑色の盤



『戲猫図』宋（明末？） 台湾国立故宫博物院所蔵 出典：台湾国立故宫博物院アーカイブサイト

桃の葉が茂り牡丹の花が咲く庭で8匹の猫が戯れている。奥の卓上に珊瑚が挿された瑠璃瓶が見える。

何のための祭壇だろう。仕切り幕の両端には鳳凰と竜、吊り飾りの先には人型に見える幡^{ばん}が下がっている。邪を払い場を清め、季節の到来を祝い長命を祈るための設えだろうか。

古代中国では青銅の「尊^{そん}」は祖先神を祭るときの酒器だったので、この絵の紫色の器にもお供えのお酒もしくは水が入っているのだろう。さてその両脇の挿花が気になる。赤い珊瑚が瑠璃色の器に挿されているようだ。器は梅瓶型で、絵をよく見ると後ろの幕の形が透けて見えるので、ガラス製だろう。

中国絵画を調べていると珊瑚を器に挿した絵が意外と多い。同じように靈芝（マンネンタケ）も器に挿してよく飾られている。神仙の宝物的な意味合いがあるのだろうか。

仏教の経典には極楽浄土の七種の寶石である七宝^{しちぼ}のことが書かれていて、珊瑚はその一つである。瓶（宝瓶^{ほうびょう}）も仏教の八つの吉祥模様の一つなので、珊瑚を瓶に挿して仏に供えることが徳の高い行いとなり、やがて仏教に限らず様々な場で珊瑚の挿瓶が供え飾られるようになったようだ。

珊瑚は遠く地中海から中国へ運ばれてくる。西洋では魔除けのお守りとして、海が育んだ神秘さが中国人を魅了した。ただし手に入れられるのはごく限られた人達だったはずだ。猫が遊ぶ庭の主人はどんな人物だろう。皇帝が描かせたものかもしれない。

ところで、仏教での七つの宝は美しい貴重な宝であるだけではない。七宝の部屋というものがあり、そこで人は金の鎖で繋がれてしまうのだと説く。宝に心を奪われてしまっただけではないのだ。

この絵の珊瑚からは、人々の幸せを願う、大いなるものに捧げ祈る心を感じる。猫たちのように無邪気で心安まる世の中を願う心でこの珊瑚は挿されているのだと思う。

①



『玩菊図』明 陳洪綬 台湾国立故宮博物院所蔵
 出典：台湾国立故宮博物院アーカイブサイト
 陳洪綬（1598～1652）は明末清初の文人画家。独特の画風は後世に影響を与えた。6月号の『仙人獻寿図』も彼の作。

中国の挿花

⑩

仙溪

9月に因んで菊の挿花を。

明代末の『玩菊図』には、岩の上に置かれた花瓶に黄葉した柿の枝と白菊が挿されている。それと向かい合う人物は長い杖を持ち、奇妙な形をした自然木の椅子に座っている。（図①）

台湾故宮博物院の解説ではこの人物のことを「高士」と表現している。調べると、志が高く立派な人格を備えた人物、人格高潔な人、世俗を離れて生活している高潔な人物、隠君子、のことである。流祖、富春軒仙溪が思慕したであろう後漢初期（1世紀）の隱者・

巖光（巖子陵）のような人のことだ。解説には「菊を愛した陶淵明（365～427）を彷彿とさせる」ともある。

陶淵明も職を辞して故郷に戻り、自ら農作業に従事しつつ生活に即した詩文を多く残した人物である。

この絵をじっと見ていると、自分が絵の中の人物と入れ替わって花と対話しているような気分になる。自分がいた花から何かを教えてもらっているような感じがした。

「菊は隱遁と君子の高尚な品格を象徴し、絵の中の人物は単に花を愛でているだけではなく、自然に近づくことの追求を反映して、物と自己との一体

③



『画院画十二月月令図・九月』（図④）の部分。 籬（まがき）に菊の植え込みが並び、主に女性と子供が楽しんでいる（図②）。船に菊鉢と酒壺を積んでやってきた人とそれを出迎える人（図③）。重陽節に自慢の菊を持ちよって菊酒を飲み詩を詠む。

②





『画院画十二月月令図・九月』清 台湾国立故宫博物院所蔵 出典：台湾国立故宫博物院アーカイブサイト

清朝皇帝の離宮・円明園を舞台に十二月それぞれの行事や生活の様子が描かれた十二幅の軸の1つ。円明園は1709年に庭園ができた後、様々な建物が増築され、噴水や西洋楼も建てられたが、1856年第二次アヘン戦争以後、他国による略奪と破壊、さらに文化大革命をへて荒廃した。現在は重点保護文化財の指定をうけて修復を進めつつ、多くの観光客が訪れている。

性の境地にまで昇華します。」と解説にある。中国文人の心の有り様を深く表現した文章だと思ふ。挿花図を探すうちに、華道の深奥に通じる言葉に出会うことができた。

清代前期の『画院画十二月月令図・

九月』には重陽節に菊を愛でる様子が壮大に描かれている。(図②③④) 北京北西の離宮、円明園を舞台に十二月月それぞれの行事や生活の様子が描かれた十二幅の軸の1つだ。 九月九日、重陽節。災厄を避ける目的で菊酒、茱萸、登高(登山)という

風習が漢代から始まり、唐宋の頃には文人雅士の飲酒、賞菊、登高、賦詩を行う節日となった。 絵には菊の植え込み(図②)や鉢植(図③)が描かれている。船で菊の鉢を運ぶ様子や、今まさに菊会に船で到着した場面も。船には酒壺も積まれて

いる。挨拶を交わす人。楽しいな会話が聞こえてきそう。 菊を愛でて酒を酌み交わし詩作する人たち。画面奥の裏山ではピクニックを楽しんでいる人もいる。 日本の江戸時代中期頃か。隣国の花事情が緻密な絵から想像できる。



『曹大家授書図 軸』清 金廷標 台湾国立故宮博物院所蔵 出典：台湾国立故宮博物院アーカイブサイト

金廷標（？～1767）は清代の画家。中国南部、浙江省湖州の人で、乾隆帝が南巡した折に才能を認められ宮廷画家となった。満州人の乾隆帝が、漢民族の故事や伝統文化を大切に絵に描かせたのには、どんな意味があったのだろう。書を授かろうとする子どもの頭髪の結わえ方が他の子たちと違うのは何故だろう。

中国の挿花 ⑪

⑪

仙溪

今回紹介する二つの絵には多くの幼子が描かれている。中国絵画にはしばしば目出度い意味をもった植物や動物、器物とともに幼子が微笑ましい仕草で描かれる。幼子も目出度い宝だというメッセージが感じられて、見ていて心が和む。

小さな子どもが遊ぶ絵は『戲嬰図』『嬰戯図』と題されているので検索してみてほしい。遊びや季節の行事の様子が描かれ、伝統的な生活文化を目で見ることができる。

『曹大家授書図』には6人の子どもが描かれ、そのうち年長2人が字を書く女性に対して畏まっている。

「班昭援筆授書」という故事に依ると故宮博物院の説明にあった。班昭という女性が筆をとり書を授ける場面。

班昭は後漢（25～200年）前期の著作家で、父も兄も歴史家であり、兄の班固が遺した未完の『漢書』を書き継いで完成させた。若くしてその才を認められ、宮中で後宮后妃に教える師範となり「曹大家」と呼ばれた人物である。（曹は早世した夫の姓）

絵の場面は清の時代に置き換えられているようだ。宮中の一室だろう。庭に白梅が咲き、南天の実が赤い。優雅な脚の高卓には寒牡丹の鉢。白磁の盤



『戲嬰圖 軸』清 金廷標 台湾国立故宮博物院所蔵 出典：台湾国立故宮博物院アーカイブサイト 子どもの頭を見ると幾つかの違いがある。大人の髪形から推測すると清の時代を描いた絵だろう。他民族融和の願いがこめられているのではないだろうか。

に寿石と水仙で作られた盆景。竹籠に松や椿が盛られ、その横に火盆が見える。季節は冬だ。満月門の向こうで梅の木に吊るした爆竹に火をつけようとしている子どもがいる。中国の正月、春節を迎える準備の情景らしい。このあと「福」と書かれた赤い紙を戸口や部屋に貼って新年を迎えるのだろう。

『戲嬰図』には11人の子どもが描かれているが、楽器を持って演奏し、竹馬に跨がり勝負する様子からは、新年を迎えて楽しく遊ぶ賑やかで幸せな雰囲気伝わってくる。

庭の木々や建物のつくりが『曹大家授書図』と似ている。おそらくこれら二つの軸は新春前後の宮中を描いた対の絵ではないだろうか。年末の厳肅な緊張感と、新年を迎えた慶びと、その両方が鮮明に感じられる。

さて、どちらの絵にも挿花が描かれている。

先の絵では壁に貼られた絵の中。白瓷の花瓶に蠟梅、椿、万年青の葉がいけられて、水仙と寿石の盆景、靈芝、柿の実が添えられている。

後の絵では机上の細首花瓶に紅梅、南天、松、椿がいけられ、同じく水仙と寿石の盆景が添えてある。

解説によれば、前者を瓶供図とし、

後者を「梅瓶に南天等が供えられている」と説明している。お供えであれば仏壇や祭壇を連想するが、調べてみると中国には「清供」という文化が古くからあって自分への供え物のようだ。

【清供】とは

中国の特に文人や士大夫階級の間で愛されてきた重要な概念で、精神的な豊かさを追求するために、日常生活において清らかで高尚なものを（自分に）供える（身近に置く）行為やその物をさす。

供物は自然や芸術を感じさせる花、石、香木、盆栽、陶磁器などで、書や画、詩の創作およびその鑑賞も含まれる。 <Chat GPT>

暮らしの中で高尚なるものを身近に置いて精神の充足を願う、その一つに挿花があった。植物や物がそれぞれ象徴する意味に、豊かな暮らしへの願いを託していた。そうと知って中国の絵を見ると、理解が深まる気がする。

二つの絵は大昔の故事を清の時代背景で描き、掛け軸にして飾ることで、教育と伝統文化の大切さを伝えつつ、絵自体が清供としての役割を果たしたのだろう。中国人が花をいけ、絵に描いて飾った気持ちに、一歩近づけた気がする。

中国の挿花 ⑫

仙溪

6種の花器それぞれに、晩秋の花卉が素朴に挿されている。どの挿花も花卉の種類は1種あるいは2種で挿し方も自然体だ。

右上はハゲイトウ、オモト。ハゲイトウは熱帯アジア原産だが、中国には宋時代に伝来。雁来紅とも呼ばれる。

オモトは日本と中国原産。
左上は中央に赤みのさす白色中輪キク。

右中はチャノキの花だろうか。チャノキは中国西南部原産。開花は秋。

真ん中はスルガランだろう。中国南部原産で夏から秋に咲き、とても良い香りがする。
右下は2種の小輪キク。

左下は2種のアスターか。アスターは中国北部原産。

花器の素材、形、焼き方、絵付けも様々。花台も4種それぞれ違う。さりげなく如意が置かれて吉祥画の体裁をとっているが、主役は花たちだ。

さて、この軸は織物である。中国では緞絲（こくし）と呼ばれる綴織だ。宋時代以降、花鳥画や山水画を多彩な

糸で緻密に織り上げたものが宮廷に飾られた。中国南部の蘇州が緞絲の中心地だったそうだ。

過去の記録的な意味を込めて乾隆帝がつくらせた挿花の軸のように感じる。縁起の良い花や器物の絵が主流の時代に、素朴に花を器に挿す行為の清らかさを伝え残したかったのでは、などと想像をふくらませている。



『清 乾隆 緞絲博古花卉集錦 軸』 清 18世紀後半頃 台湾国立故宫博物院所蔵
出典：台湾国立故宫博物院アーカイブサイト

中国の挿花 ⑬

仙溪

中国では春節（旧暦の正月）に、幸福を招いて厄を除ける願いを込めて、家に飾っていた年画を貼り替える習慣があつて、今でも地方で行われている。年画は民間の木版画であり、

そのまま部屋や扉に貼って一年を過ごす。

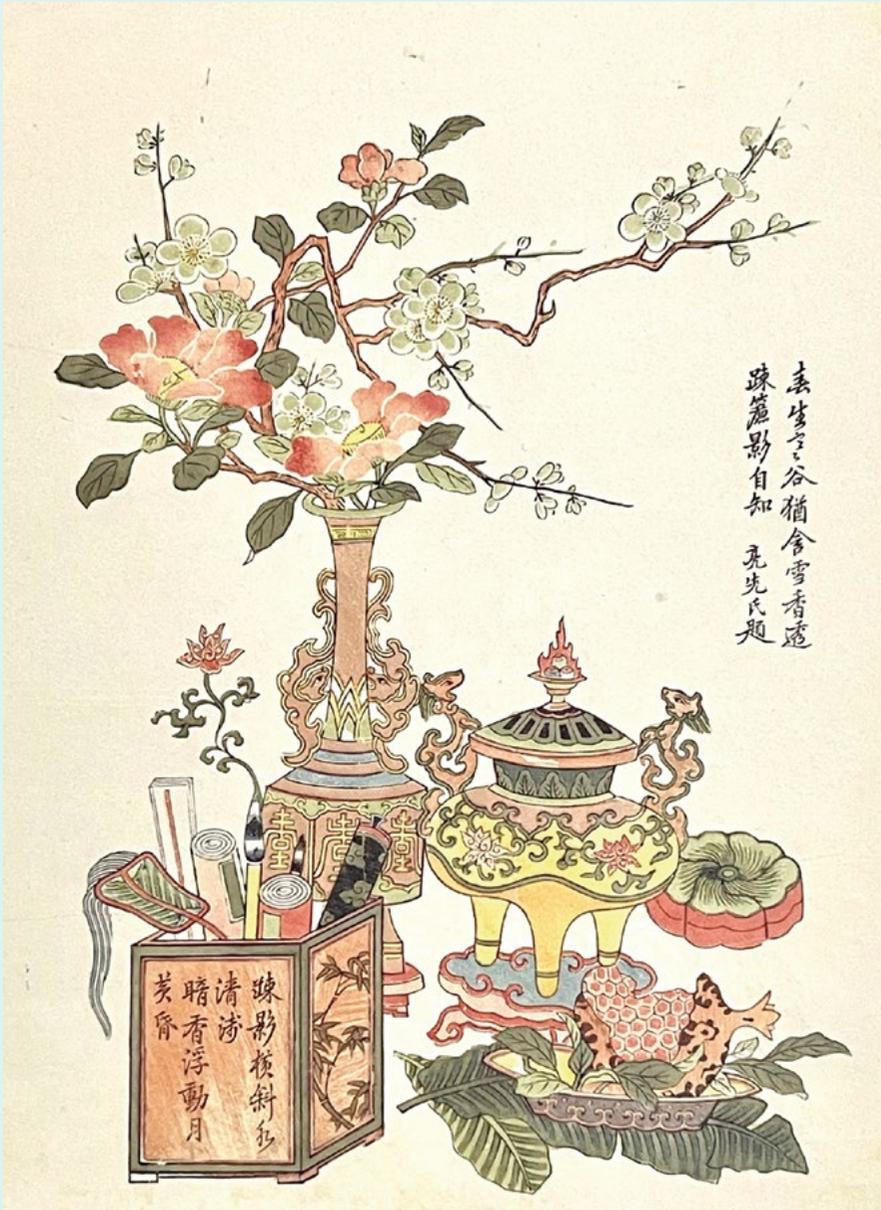
もともと桃の木に彫った門神像を門にかける風習が漢代にあったのが、絵師による絵に変わり、やがて明時代（1368～1644）の版画技術の広まり

によって庶民の間で木版年画が生まれ

たそうだ。年画には農民が農閑期に1人でつくる素朴なものから、絵師、彫り師、摺師が分業でつくる精緻な物まであり、題材も門神、財神、縁起の良い植物・

動物、芝居や物語の人物や場面、子ども

の道德教育など様々だ。



春生々々 猶含雪香透
疎影斜私
亮先氏題

疎影斜私
清香浮動月
暗昏

『花卉博古图』丁亮先 清時代 18世紀中頃 紙本 木版 多色摺 空摺 海の見える杜美術館所蔵
37.5 × 30.1cm 出典：『蘇州版画の光芒 国際都市に華ひらいた民衆芸術』2023年特別展図録

『花卉博古图』は丁亮先という絵師が描いた吉祥画の木版刷りで、子宝を暗示するザクロや、特殊な能力を持つ芭蕉扇（軍配に似た道具）、花が咲き出る筆（李太白の夢に出てきた筆花）などとともに、白梅と赤椿の挿花が描かれている。梅は「好文木」とも呼ばれ、学問の象徴として知られている。手前の箱に

疎影横斜水清浅
暗香浮动月黄昏

（梅の）疎らかな枝は清い流れの水に斜めに影を映し、ほのかな香りが月の昇るたそがれ時にどこからともなく漂ってくる。

とあるのは、北宋の詩人・林逋の詩の有名な一節で、対で門柱に書かれることが多いそうだ。（一対の句は対聯と呼び、春節に赤い紙に書かれたものを門の両側に貼るのを春聯と呼ぶ）

かつての中国の一部かもしれないけれど、花を花瓶に挿した絵が、庶民の日々の暮らしを明るく照らしていた。高尚な挿花を絵に描いてまで身近に置こうとした中国人の、花に対する思いがどんなものなのか、もっと知りたくなってくる。

中国の挿花 ⑭ 仙溪

『歡洽寰區』は12枚の絵を束ねたもので、清代の元宵節を楽しむ子ども達が描かれている。

元宵節（上元節）は旧正月後の最初の満月の日（正月十五日）をさし、様々な灯りを灯して新年祝賀のフィナーレを飾る。現在の中国でも2月初旬には花灯と呼ばれる様々な形をした灯籠が人々を楽しませている。

元宵節の灯りの起源は漢代に「太一



⑬『歡洽寰區 冊5 花灯会』 ⑭『歡洽寰區 冊12 清供图』
無款 清時代 絹 台湾故宮博物院 20.5 × 27.5cm



『集古名繪 冊 明 仇英 江山萬代』 仇英 明時代 台湾故宮博物院 25.7 × 32.1cm

神」を灯火で祀る伝統に遡る。太一神とは天地万物の根源として天を主宰する神。北極星の神格化されたものともされている。その祭神灯火が隋代に元宵節灯会となり、唐代から煌びやかな新年祝賀行事となった。

12枚の絵すべてを紹介できないのが残念だが、太平有象、竹馬行、箏図、燃竹図、花灯会、嬰戲図、戯球提灯、魚鶴双灯、吉祥灯慶、双灯会、戯羊図、清供图、というタイトルから楽しげな情景を想像してもらいたい。これらの

中の2つに花を挿した花瓶や花籃を手持って歩く子どもの姿が描かれているので紹介しておく。花は冬咲き牡丹、南天、蠟梅、水仙（球根のまま）、薔薇のほかにも灵芝まで。挿花を運んでいるというよりも、自然の象徴としての花を恭しく捧げ持つて練り歩くことが目的であるようだ。

中国には古来、中春の日に花神の誕生を祝う花朝節（花神節）というものがああり、草木や生き物の豊穰を願った。時代とともに花見の起源となったり廃

れたりを繰り返してきたそうだが、近頃復活の兆しがあるらしい。『清供图』に花を持って歩く様子は、この花朝節とも関連があるのかもしれない。

明代の画家、仇英の『江山萬代』にも似た様子が描かれている。妙なる自然が後の世まであらんことを願う題がつけられている。子どもが持つのは万年青とマリーゴールド（万寿菊）のようだ。

子ども達の楽しげな表情に花と人の繋がりを思う。私たちのいけばなにも通じる「心」を感じる。

中国の挿花

⑮

仙溪

竹（もしくは籐）で精巧に編まれた手付きの花籠（花籃）に5種類の花が盛り込まれている。中央に赤い椿。左に白梅（緑萼梅）、水仙。右に蠟梅と沈丁花が見える。冬の花たちだ。描いたのは南宋（1127～1279）の宮廷画家、李嵩（1170～1255 諸説あり）。同じ構図で描かれた春夏秋冬の花籠図の1つと思われる。

このような籠花が実際に飾られていたのだろうか。それとも花瓶に挿すために集められた花々の絵だろうか。いずれにしても日本では鎌倉時代（1180～1336）前半頃の、中国宮廷での一コマである。

いけられたものであれ、ただ盛り重ねただけであれ、季節の花を折り取って身近に觀賞していたのは間違いない。それを絵師に美しく花それぞれの個性とその調和を見事に描かせていることから、花に対する特別な思いが感じられる。

北宋時代に繁栄を極めた開封を金に奪われ、南の臨安（杭州市）に都を遷してから、海上交易とともに更なる経済発展を遂げた南宋時代。士大夫、文人、商人、僧侶、大衆それぞれに文化は醸成されていった。そしてそれらは日宋貿易によって日本に浸透して行く。

中国の花文化は時代や階級、社会背景によって様々だが、一貫してとても豊かなものであったことは、多くの絵画を通して容易に想像できる。



中国の挿花 ⑬ 仙溪

様々な花を籠に盛り、多くの瓢箪と一緒に細い杖で軽々と背負う女性。繊細な手指の先に長い爪が見える。仙女「麻姑」である。西王母に花と美酒を献ずる「麻姑献寿」の絵だろう。

神仙世界で最高位の女神である西王母は、諸神が住む崑崙山を統治し、不老不死の桃園を管理している。その西王母の誕生日である三月三日に行われる蟠桃会には、集まった神や仙人に数千年に一度実をつけるという蟠桃がふるまわれる。蟠桃会には牡丹、芍薬、

海棠などの花神（花仙）たちがそれぞれの花を献じ、麻姑は自ら採った靈芝でつくった酒を献じたと伝わる。その馥郁とした香りに西王母は大満足。ゆえに麻姑が酒を献じる絵は長寿の象徴とされている。

「麻姑献寿」にはいろいろな図柄があるようだが、酒、桃、靈芝、実や花のいずれかの組み合わせとともに描かれる。12世紀頃の画家、馬和之の麻姑像には籠に盛られた花が印象的だ。菊、野菊、石榴、山桃、薔薇、靈芝、蓮根も。西王母のために集めた長寿の薬草と見る事もできそうだ。

もう一点、大変美しい麻姑像を見つけたので紹介したい。18世紀、清代に描かれたもので、作者は不明。ポーランドの博物館に所蔵されているようだ。左手に靈芝をつまみ、右手に実のついた桃の枝を持っていて花が挿された花籠が下がっている。薔薇と金盞花、紅毛丹（ランプータン）のようだ。髪には牡丹の花飾りも見え、仙女の美しさを際立たせている。

これら二つの麻姑像からは仙女の自然に対する敬虔な気持ちを感じる。描かれた花は「自然」の象徴なのだろう。



①『麻姑仙像 軸』馬和之 宋時代 台湾故宫博物院
紙 124.4 × 62 cm
②『麻姑女寿仙』清時代 ワルシャワ国立博物館
絹 142.2 × 87 cm



中国の挿花 ⑱ 仙溪

南宋の宮廷画家、劉松年による『博古圖』には古銅器や古陶磁器を鑑賞する文人たちが描かれている。屋敷の庭に古器物を持ち寄り集って集い、その魅力を語り合い茶を楽しむ。そんな風流な習慣は、宋(北宋)の8代皇帝・徽宗が、自ら蒐集した青銅器の素晴らしさを後世に伝えるために、学者に研究・整理させ、1107年に木版印刷の図録集『宣和博古図録』としてまとめたことが発端であるらしい。

徽宗皇帝は自身が書画の才に優れた芸術家であり、宮廷書画家の養成を図り、書画芸術の発展に大きな貢献を果たしている。

ただしその才能は政には向けられず、人民は悪政に苦しみ地方では反乱が多発。1127年、都を金に奪われる。文化人としては高く評価される一方、皇帝としては失格者とされている。そんな徽宗皇帝が大切にしていた「博古」とは、古い器物そのものをさすこともあるが、古い事柄に博く精通することを意味する。

私たちに馴染みのある「稽古」という言葉にも同じようなニュアンスがある。先人の教えの本質をつかむため、工夫研究して考える。古を稽えるのが

「稽古」だ。「博古」にも「稽古」にも、先人から多くを学び、今に生かそうとする心が込められている。

徽宗皇帝が古に学ぼうとしたこと

が、芸術のみに向けられたのが残念に思う。でも偏った情熱ではあったが、その古に学ぶ精神は、それ以降消えては現れて、芸術文化は醸成されてきた。

徽宗が残した「博古」の精神は、人の間に受け継がれ、やがて日本にも影響を与えることとなる。



『博古圖 軸』 劉松年 1211年(宋時代・南宋) 絹 台湾故宮博物院 128.3×56.6cm (軸の中央部分)

古い青銅器や陶磁器を鑑賞する文人や婦人。挿花の器として見ているのだろうか。立花瓶のような銅器も見える。

中国の挿花^{そうか}

⑱

仙溪

中国絵画には穴の空いた石が描かれていることが多い。いわゆる奇岩なのだが、山や庭の景色だったり、室内に飾られたり、古代より中国では奇岩に対する特別な思いがあるようだ。

『琴書樂志図』（12世紀末～13世紀初）は、屋敷の庭で文人たちが琴と書を楽しむ様子が描かれているが、その一角で鉢植に水やりをする様子が目に



『琴書樂志図 軸』（部分）劉松年（生没年不詳） 宋時代 台湾故宮博物院 紙

留まった（図①）。大きな四角い鉢には奇妙な形の石とその周りに百合や菊も植えられている。これは盆栽のルーツにあたる「盆景」だろう。この絵のように器に石や植物を育てて身近に置くことは高潔な精神を養うことに繋がって流行したようだ。

宋（960～1279）、元（1279～1368）の時代に描かれた絵（図②③）には、ハスの花を横つた背の高い台に奇岩が



『嬰戲図 軸』（部分）蘇漢臣（1094～1172?） 宋時代 台湾故宮博物院 紙

おかれている。白い台は石を彫刻したものだろうか。ハス型の仏飯器を大きくしたような形だが、奇岩を神聖なものとして大切にしていたことが想像できる。

奇岩の愛好は、人も不老不死の仙人になり得るといふ道教の神仙思想が影響しているのだろう。俗世を離れ清らかな仙境へ誘うアイテムとして、奇岩や珊瑚や靈芝といった希少な自然物が特別な器に飾られた。梅や松や菊のよ



『手巻』（部分）王振鵬（活動時期 1280～1329） 元時代 台湾故宮博物院 絹

うな品格の高い植物も鉢に植えて愛でられた。水を入れた器に自然の妙味を感じる枝を挿すことも、おそらく同じ思いから行われたのだと思う。

中国の盆景は平安時代に日本に伝わり、貴族や僧侶に広まって、やがて華道の「砂の物」に繋がってゆく。

崇高なる自然に憧れる気持ちが、自然の一部と器との組み合わせを生んだ。その延長線上にいけばなががある。そんなことを絵から感じている。

中国の挿花^{そうか} ⑱

仙溪

盆栽の起源とされている中国の盆景は唐代(608~907年)に生まれたとされる。お盆に石や砂、草木を飾って風景のミニチュアを作ること、自然を味わい、独自の創意を楽しんだ。神仙への憧れや隠遁の境地を象徴するアイテムとして、奇石や風雪に耐えて曲がった松などを鉢に植え身近に置いて

た。そこに器と自然の出合いがおのずと生まれ、洗練されてゆく。

『宋人十八学士図』には5人の学士が描かれているが、画面下方左に棕櫚の鉢植、松の盆栽があり、孔雀をはさんで石菖が紫色の花尊に植えられ蓮弁型の盆托に置かれている。

特に目を引くのは、画面上部の巨大な植え込みで、太湖石が屹立し、牡丹

が植えられている。装飾を施した白い台座は「須弥座形の花台」と解説文にある。須弥座とは須弥壇のことで、寺院であれば本尊のおわす所にあたる。須弥座形花台に奇石と牡丹。この植え込み自体が神聖で厳かな空間なのだ。

この絵は同じ題名の4つの軸の一つで、他2点が台湾故宮博物院の特別展「雅集図特展」に出品されていたこと

を博物院のサイトで見つけた。

「雅集」とは、古代の文人たちが集った宴席の一つで、趣向を凝らした美味を味わいつつ、詩を詠じ、鼓や琴を奏でたり、将棋を指したり、絵画を眺めたり、品茶をしたりと、宴に興を添える娯楽も数々あり、即興での揮毫や題詠などの副産物が生まれた。宴席に集った文人たちが互いに刺激を受け、競い合ったことから、雅集は文化力を育んだ揺り籠だったとも言える。」と書かれている。

日本にも「連歌会」が文化を育んできたという歴史がある。室町時代に盛んに催され、そこには「たて花」が飾られた。日本文化の揺り籠となった集いはどんなものだったのだろうか。



『宋人十八学士図 軸』(明末期)。

台湾故宮博物院 絹 173.5 × 102.9cm

唐の太宗は文学館を建て、優秀な人材を雇い18人を学士としたが、その後それぞれの時代の十八学士図が描かれるようになる。

この絵は4つの軸の一つで、宋(960~1279)の学士を明(1368~1644)末期に描いたものだが、詳細に描写されている机や椅子、植栽や盆景などは、明末の宮廷の様子と考えられる。